



技術士だより・九州

公益社団法人 日本技術士会九州本部 夏季号＜第100号＞（平成26年7月15日発行） **100号記念特集号**



東田第一高炉



トーピードカー



転 炉



熱風管断面

東 田 第 一 高 炉 史 跡 広 場

東田第一高炉は、明治34年(1901年)に操業を始め、幾たびかの改修工事を繰り返しながら産業を支える鉄を作り続けてきました。現在の高炉は、昭和47年(1972年)に役割を終えた第10次改修高炉を保存整備したものです。北九州市は、平成8年3月27日に東田第一高炉一帯を指定文化財(史跡)に指定し、史跡広場として公開しています。広場内には、高炉の他に、東田第一高炉の歴史が分かるパネル展示や、高炉で溶かされた銑鉄を運搬する「貨車(トーピードカー)」、高炉から運ばれてきた銑鉄を利用目的に合わせた質の良い鋼鉄を作る「転炉」、高炉に熱風を送り込む「熱風管(耐火構造)」が展示されています。

〔宮崎 照美（環境・北九州）〕

目

巻頭言	1
私の提言	2
地域だより	3
声の広場	5
熟練技術士の声	7
企業内技術士の声	8
女性技術士の声	9
修習技術者の声	10
私のチャレンジ	11
技術情報	13

次

ミニ特集	15
協賛会員の声	18
100号特集・100号を記念して	19
・100号の歩み	21
・県支部活動の抱負	22
中央・統括本部情勢	25
委員会・部会報告	26
CPD報告	29
会員ニュース	30
協賛会員	31

季刊誌「技術士だより・九州」の 発行100号記念の祝辞

九州本部長 ^{か い} 甲斐 ^{ただよし} 忠義
(建設・福岡)



九州本部広報季刊誌「技術士だより・九州」の発行が100回を迎えましたことを記念しましてお祝いの御挨拶を申し上げます。創刊号は、平成元年8月に発行されました。当時の支部長は、第6代の土居貞夫氏（平成62年～平成2年間に在職）でした。平成元年の正会員数は、155名、九州技術士センター会員が289名でした。昭和62年に福岡天神の新天ビルに九州支部の事務局を初めて設置し、支部活動強化へ種々の検討が行われ広報誌発刊に至ったものと思います。以来25年間、創刊の基本方針である会員への情報提供、会員相互のコミュニケーションを充実するという方針を踏襲しながら徐々に編集内容の充実化に取り組み現在は部門別、職業業務別会員の声を掲載している外、版型もA4判とし表紙をカラー化する等体裁も充実しています。九州本部は、昭和46年6月九州支部として発足し、本年度末には50年を迎えます。この間の九州本部活動を記し続けてきた季刊誌は貴重な資料でありアーカイブスであります。この功績が成し遂げられましたのは、一重に歴代の広報委員長との努力と会員の協力の賜物であります。現在広報委員長担当の棚町修一氏は、平成16年度から完戸鶴氏の後任として現在まで長い間担当していただいております。ここに厚く感謝申し上げます。

現在、来年度の九州本部設立50周年を記念して、季刊誌の創刊号から100号までのデータを一元化したデジタルファイル化の作業を行っているところであります。

また九州本部では、設置から7年経過した九州本部ホームページを改良し、6月1日から新ホームページで運用しています。季刊誌による広報活動と合わせて広報の充実を図っていききたいと思います。

さて、九州本部の地域組織熊本県支部についてですが、本年1月9日に理事会で設立が承認されていましたが、熊本県支部役員選挙が去る5月14日開票され役員が決まりました。これで全県支部の執行体制が確立しました。本年度から統括本部及び九州本部並びに九州本部県支部の組織が連携した活動体制が本格化します。

九州本部担当の「第41回技術士全国大会」開催が11月9日～12日にわたって開催されます。九州本部（支部）での全国大会の開催担当は、第5回（昭和53年福岡市）、第15回（昭和63年別府市）、第24回（平成9年福岡市）、第32回（平成17年福岡市）でした。今回が5度目であります。開催準備にあたる全国大会実行委員会担当により順調に作業に取り組んでいます。九州本部会員多数の皆様方に参加していただきます事をお願いします。

最後に、九州本部における会員コミュニケーション活動の場となる九州本部広報季刊誌「技術士だより・九州」の益々の充実について、会員の皆様の協力をお願いし、ご愛顧いただきますことをお願いしまして発行100号の祝辞とします。

(E-mail : k.tmth@blue.ocn.ne.jp)

文明論と文化論から見えるもの

かどまつ つねひさ
門松 経久
(農業・鹿児島)



目下、環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）交渉は難航している。自由貿易をめぐる、国家間の利害が衝突。経済活動では、国際的なレベルでなくても、国内的な対立も珍しくない。

明治新政府が強力に推進した殖産興業政策に際して、大工業移植派と在来産業振興派が対立した。その対立を象徴的に表したのが、福沢諭吉が時事新報に掲載した社説「農商務省の大改革」である（1897年3月28日付け）。農商務相候補にあがった前田正名を追い落とすべく、「珍しくもなき精神家（熱情家）」で、「本来無職無学、文明の思想に乏しく普通の感識さへなくして、固より商売実業発達の理勢を知らず、区々たる人々の保護干渉を以て興業殖産の目的を達し得べしなど盲信する輩」と酷評した。

前田を酷評した理由について、福沢が前田の言論と行動における狂信的な精神主義的国家主義に対して気質的に強く反発したためと指摘されているが、経済思想自体において、両者には差異が認められる。

福沢は、文明開化の啓蒙家で、自由主義経済論者。一方、前田は、経済官僚で、自由主義経済に基本的に反対の国民経済学に近い思想をもつ。

福沢は、日本の産業経済の原動力は外国貿易だと断じて「諸港を放開して輸出入の関税を全廃し、外国品の輸出入を自由自在にして東洋一種の倉庫港と為し、物品の入るを咎めず出ると問わず、その出入の間に我貿易の勢を進めて我国産物の出を増し、我国民の利する所は殆んど底止する所なかるべし」と楽観視し、「自由港」と自由貿易を高唱する。

前田は、輸出拡大を志向しながら、貿易の基である産業の脆弱な体質への危機意識が特徴的といえる。輸出入の額は増えていても、実態として農工商業の利益は減少して収支がとれていないことや、粗製濫造の製品が急増していることなどから、輸出産業に対して警鐘を鳴らす。そして、前田の狙いは、生糸・茶・織物など地方の諸産業について、関係者の

団結を促して系統的な団体を整備し、①その改良発達、粗製濫造の防止、②流通機構の近代化と直輸出の振興、③政府・議会への働きかけによる諸制度・諸施設の整備を進めるところにあった。

前田は1892年以降、「前田行脚」と呼ばれる実業団運動を積極的に展開し、織物や陶器などの輸出品七業者の団体である五二会、日本蚕糸会、日本茶業会、日本貿易協会、大日本商工会等々を誕生させた。また、開田事業にも着手した。当時の国民的産業である農業と中小の在来産業が対象であった上、それらの産業が緊縮財政の犠牲を強いられていたため、「前田行脚」の影響は大きかった。福沢に顧みられることのなかった在来産業の担い手である農民や中小生産者にとって、前田の単純明快な説明と道義的な熱弁は説得力をもったということである。

福沢と前田の思考と行動について、立場の違い以上に、視点の違いに文明と文化ほどの差異があると思う。言い換えると、文明と文化の原義—文明が都市の意civic、文化cultureが耕作の意に由来していることから、両者の特質を概念的に表すと、civicが普遍的・短期的・進歩的であるのに対し、cultureが限定的・長期的・保守的となろう。

福沢は、文明を三段階に分け、「野蛮」から「半開」へ、さらに「文明」に進展するとし、日本は「半開」に位置して欧米の「文明」の段階を目指すべきだと主張した。一方、前田の注目する地方、農村には長年にわたる人びとの人知の蓄積と、これに基づく営みがある。したがって、福沢の主張は都市・文明の論理、前田のそれは農村・文化の論理といえよう。

私たち、技術士の活動は、文明の性格が強い。人びとの生活が安全で便利に快適になるように技術の開発、応用に努めているが、明治期の殖産興業をめぐる対立は、私たちに文化の視点も必要なことを教えている。長引くTTP交渉から考えたことだ。

(E-mail : t-kadomatsu@m-technos.co.jp)

地域だより

大分

小規模集落の水確保 技術支援・近況報告

じゅふく ようじ
寿福 洋二
(農業・大分)



過疎や高齢化が進む地域では、生活用水の不足や水質悪化、維持管理などが問題となっていることから、「技術士会大分県支部」は平成20年に大分県からの要請を受け、小規模集落（限界集落）の水問題解決のため技術支援として参画しています。以来、平成23年にはNPO法人「おおいたの水と生活を考える会」に発展し、今に至っています。

地域や市町村から相談があれば、技術者を派遣して地元の要望や施設の問題点などを調べ、行政側へもアドバイスする役割も担っています。このほか、高度な水処理装置を導入しても運用面での問題が多いため、簡易給水施設の開発も行っています。

これまで、県内各地のモデル地区を現地調査し、施設や維持管理等の指導を行うとともに、行政と連

携して、地域水問題の技術支援や維持管理講習会などを行ってきました。

平成25年度は各市町村や保健所と連携して、地域での給水施設の実態把握や中長期計画策定などを支援しました。さらに、地元企業と共同開発した簡易給水施設について、高濁度水処理や、ろ過材の検証を行い、維持管理面の耐久性も確認できました。また、小規模な給水施設向けに、維持管理に関する正しい知識や良質な水を得るための具体的なノウハウを手引き書にまとめました。

このような実績の積み上げにより、最近ではマスコミに取り上げられたり、各方面に認められるようになりました。今後はホームページの充実を図り、県内全般に当組織の認識を高め、各地域の給水施設管理者への情報提供活動を行っていく予定です。そして県が進めている小規模集落支援の一環である給水支援事業を、県や市町村と協働しながら、新しい技術支援法人を目指していきます。我々「技術士会大分県支部」も当NPO法人の活動を通じて、さらに『技術士』の認知度を高めていきたいと考えています。

(E-mail : jyufuku@kyutoku.com)

鹿児島

鹿児島県支部の 地域だより

いうち よしひと
副支部長 **井内 祥人**
(森林・鹿児島)



大正3年（1914年）1月12日、桜島は大噴火を起こした。いわゆる「大正大噴火」である。この噴火による溶岩流出により桜島という島は大隅半島と陸続きになった。

今年はこの大噴火から、ちょうど100年目にあたる。

年初めより大正大噴火100年を記念して、県内で開催される講演会、技術研修会でも、「火山噴火」にまつわる話題が例年になく多く見受けられる。

平成26年1月12日、桜島で開催された「桜島大正噴火防災100年式典」では、住民や噴火によって県内各地に移住した子孫ら約750人が参加した。火山専門家の講演会では、桜島のマグマだまり状況は、いつ大正大噴火級の大爆発が起こっても不思議はな

いということであった。式典の最後に桜島島内の児童・生徒たちが「火山を知る。噴火に備える。教訓を伝える。」という誓いの宣言を行った。

また鹿児島大学が2013年に行った鹿児島市内の全公立学校124校に対しての防災教育のアンケートでは、学校の避難訓練で火山噴火を想定している学校は1割である。この1割という数字を多いか、少ないかは人によって意見が異なるだろう。活火山を目の前にして生活している人たちの意識でもある。

寺田寅彦は「津波と人間」の中で、こんなことを書いている。

「災害を防ぐには、人間の寿命を十倍か百倍に延ばすか、ただし地震津波の周期を十分の一か百分の一に縮めるかすればよい。(略)しかしそれが出来ない相談であるとすれば、残る唯一の方法は人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力する外はないであろう。」

「知る。備える。伝える。」この言葉は、私ども技術士を含む技術者にとっても、常に意識しておくべき言葉であると、大正大噴火100年にあたり、再認識しているところである。

(E-mail : iuchi@cecon.co.jp)

宮 崎

宮崎県支部設立式典・ 祝賀会を開催

すが しのぶ
菅 忍
(建設・宮崎)



公益社団法人日本技術士会九州本部宮崎県支部は、平成25年9月に統括本部においてその設置が決定された。その後、11月に九州本部より支部長の承認を受け実質的に発足し、去る5月24日に設立式典と祝賀会が開催された。

式典には、支部会員や関係者など約60名が出席し、まず、藤原秀志支部長が支部設立の経緯の説明と、「防災・減災の支援活動等を推進し地域社会の発展に貢献していく」と意気込みを語った。次に、甲斐忠義九州本部長が「技術士を天職として社会に貢献していこう」と支部会員に訴え、続いて、来賓の日本技術士会副会長の佐竹芳郎氏、宮崎県副知事の内田欽也氏、宮崎市建設部長の横井吉隆氏、国土交

通省宮崎河川国道事務所所長の竹林秀基氏、農林水産省西諸農業水利事業所所長の橋本晃氏がそれぞれ祝辞を述べた。この中で、内田副知事は「インフラの老朽化や南海トラフ巨大地震への備え、景観づくりなどに支部会員が協力してほしい」と呼び掛けた。

その後、満留康裕宮崎県支部業務企画委員長が、宮崎県支部の今後の5つの活動方針を説明した後、記念講演として、甲斐九州本部長が「公益社団法人日本技術士会の活動」、沼尻健次九州本部副本部長が「技術者倫理」、宮崎大学工学部教授原田隆典氏が「南海トラフ地震への備えと技術士の役割」と題してそれぞれ講演された。

引き続き祝賀会に移り、一般社団法人宮崎県測量設計業協会会長の西田靖氏による乾杯の音頭によりはじまった懇親会は、式典が滞りなく終了した安堵感も相まって、大いに盛り上がった。最後に、「支部会員の中で最も多く正会員の会費を支払ってきた」と自負する支部会員最古参の一人である経営工学部門の黒木英浩氏の音頭により一本で締めた。

(E-mail : suga@lapis.plala.or.jp)



藤原 宮崎県支部長



甲斐 九州本部長



佐竹 日本技術士会副会長



内田 宮崎県副知事



宮崎県支部設立式典全景

災害考

たけうち りょうじ
竹内 良治

(建設、上下水道、衛生工学、総合技術監理・北九州)



1. はじめに

釜石の奇跡（登校児童犠牲者0）を起こした片田群馬大教授は、次の災害に、高潮の襲来を上げていた。今から考えるとスマトラ地震は、耐津波対策の注意喚起メッセージだとすると、昨年、台風30号によるレイテの高潮は、同じく伊勢湾台風を覚えていますかというメッセージかも知れない。

地震、噴火、台風は自然現象であり、これらが人間社会に影響を与えて、震災、水害などの災害が生じる。したがって、耐震化、防波堤、止水壁などのハード整備と共に、教育、訓練などのソフト対策の充実により減災はいくらでも可能である。人命にかかわることは、ソフト対策の方が大切ではないか。

2. 災害に学ぶ

東北大地震時、最初30秒の地震で津波第一報を出し、これが過小予報となった。ところが地震は2分近く続き、停電と相まって大被害となった。我が国では気象庁マグニチュード(M)を使っているが、もうひとつモーメント(M)がある。前者では8.4しかない。今回に限り、モーメントMをもちいるとし9.0を出した。しかし、東南海、南海地震では依然モーメントMを用いている。しかも、モーメントMは金森博雄博士が東大を飛び出し、カリフォルニア大学で1977年に提案された。

従来、将来起こりうる最強の地震動を350～450gal、およそ現実的でない地震動を450～600galとされていた。

兵庫県南部地震で高感度地震計が振り切れたため、全国1000箇所に強震計を設置した。その結果、2004年の中越地震では2516gal、2008年岩手宮城内陸地震では4022galを記録した。震度表示もMも国際的な見直しが必要であろう。科学館での地震体験装置から震度7は危険につき削除するべきであろう。

3. 災害の連動化

巨大自然現象が連動して起きてきた。これを理科年表によって、過去をさかのぼってみる。

869年(貞観)に3.11東北大震災に匹敵する地震津波があった。しかし、被害は犠牲者千名である。また、多賀城の時代である。その5年前、富士山が大噴火し、14億㎡のテフラを噴出し、青木樹海を形成し、湖も二分した。しかし、当時、関東の人口は少なく、災害も小さかったと思われる。

887年南海地震
1096年東海地震 1099年南海地震
1361年南海地震
1498年東海、東南海、南海地震
1605年東海、東南海、南海「慶長地震」
1703年江戸直下地震
1707年東海、東南海、南海「宝永地震」
 当地震50日前、富士山噴火7億㎡
1854年東海地震、一日後、南海地震
1855年江戸直下地震 ここまで東北省略
1896年明治の三陸津波
1923年関東大震災
1933年昭和の三陸津波
1944.12月東南海地震 1946.12南海地震

江戸幕府に引導を渡した1854年の巨大地震は嘉永に起こったが改元され、「安政地震」となった。江戸町民は「世の中が安き政となるならば嘉永そんな人も助かる」と残している。この巨大地震の年表を見ると、百数十年毎に、東海から南海まで一気か、一日から数年の間を空けて襲っている。

火山も知識として知っておく必要がある。火山は日本中に散在し、予知できる場合と出来ないときがある。2000年の有珠山は事前避難で予知できたが、2011年の霧島や2013年の桜島観測史上最大噴煙などは事前には何も注意報は出されなかった。大正の大噴火も避難させられず、多数の犠牲者を出した。

地質的な最近の爆発は7300年前、俊寛が流されたという喜界島カルデラの爆発で噴出テフラ100km³といわれている。義務教育に「災害」という科目があっても良いのでは。

(E-mail : takeuchi.0123@jcom.home.ne.jp)

Ⅱ

“シニアエンジニア” として思うこと

よこやま ともみつ
横山 知充
(機械・長崎)



大学卒業と同時に現在の会社に就職し、現在64歳。一つの会社に42年間お世話になっていることになるが、60歳を迎えた際、社則に則り定年退職となり、引き続き同じ職場で再雇用となった。それまでの最前線の業務を担当する現役と異なり、後方支援業務が主業務となった。会社生活では、火力発電所向けボイラの構造強度に関する設計、火力発電所向けプラント製品のアフターサービス、及び品質マネジメント業務にエンジニア/マネージャーとして携わって、自分では多忙な中でも充実した会社生活を送ってきたと感じていた。後方支援業務といっても、これから何をするか、何ができるかを本気で考えた。

65歳までは、現在の会社に勤めることができるが、これまでに身に着けた知識で、後輩へのアドバイスなどができると自分では思っても、グローバル化やダイバーシティーが叫ばれる事業環境の激しい変化の中で、既存の知識だけで本当に役に立つのか？少なくとも現役が進める事業展開や若手の育成の邪魔になることは避けなければいけない。

また、少子高齢化社会の日本では、近い将来、現役世代とシニアの割合が1対1の割合になることを考えれば、若手への技術伝承をする人も必要であろうが、後方支援も含め経験を活かして実業務を行う人の方が必要ではないかと考えた。働ける間は、自分の糧は自ら得るものであると自覚し、その上で、「つとめ」をどのように果たすかを考えた。

「働く」ということが、「かせぎ」と「つとめ」の要素から成り立っているといわれているが、シニアエンジニアとなった今、「つとめ」の要素を強く意識して、健康である限り社会との係りを持ち続けたいと考えた。その為には、60歳を過ぎても、分野や深さは異なっても「知的好奇心」を持ち続けていくことが必要と考え、その足がかりの手段として「技術士」の資格取得を目指した。これまで携わった業務領域では、ごく一部の業務を除き、公的資格者の

関与が業務のプロセスゲートになることがなかった為、資格取得には殆ど無関心で会社生活を過ごしてきた。「技術士」の資格取得といっても、これまでの業務経験から技術部門は「機械部門」、選択科目は取って基礎知識に拘り「材料力学」を選んだ。

1次試験の受験準備には苦労したものの、2次試験（論文、面接）は、会社業務でお客様への提出資料作成・説明を数多く経験し論理的な思考に慣れていたことで、スムーズに対応することができ、幸いにもそれぞれ1回で合格することができた。

これにより、技術士としてスタートラインに立つことができたが、技術士試験を通して、技術士には「資質向上の責務」があることを知った。正に、シニアエンジニアとして激しく変化する社会の要求の中で「つとめ」として社会に関与していくために求められる責務と理解し、この継続研鑽（CPD）の実践に取り組むことにしている。

特に、東日本大震災、それに続く福島第一原子力発電所の事故以降、世界の動力エネルギー分野は大きく動いており、私が所属している会社でもこれまでライバルであった会社との部門分離統合が行われるなど大きな変革が生じている。

こうした中で、東京などで開催される最新技術に関するセミナーやシンポジウムに参加することなどから継続研鑽に努めている。“労を惜しんでは得られるものも得られない”の意気込みである。

いよいよ現在の会社生活も残すところ1年をきり、社会のお荷物になることなく「つとめ」を果たしていく新しいスタートの時期を迎えている。

「技術士」資格を取得しているから何かができるというものではないことは承知しているが、シニアエンジニアとして継続研鑽を積みながら経験を活かしてできることは何か？あまり難しく考えることなく、身の丈に合ったことを確実に積み重ねることで良いのかも知れない。

(E-mail : ureri-yokoyama@nifty.com)

投稿へのお願い

「声の広場」は会員の皆様の自由な意見交換の場としておりますので、ふるって投稿をお願いいたします。

投稿希望の方は九州本部事務局までメールでご連絡下さい。

メールアドレス : pekyushu@nifty.com

熟練技術士の声

技術士、技術士会の社会的存在感 醸成と、技術士の自立に向けて

いずみだて あきお
泉 昭雄
(電気電子・北九州)



1. はじめに

平成元年に、電気部門で合格しました。動機は、新日鉄から山九に出向、時代は不況で会社の新規事業開拓（電気工事）のためでした。他方、実務では、初めての企業訪問時、“技術士”の肩書でドアを開けてもらい、入ってからは、本当の実力で対峙しました。多くの国内の企業、海外（東南アジア、中国）の企業で仕事をしましたが、やはり山九という看板、資金力、営業力、多くの仲間があったからできたことです。

山九定年・62歳からは、技術者の社会的地位の向上を志し、技術士会活動に注力しました。生業は、技術士事務所を開設しコンサルタント業務です。不況の時代で民間は余裕なく、九州経済産業局、福岡県、北九州市他の中小企業支援事業等、主に公的機関の技術コンサルに対応をしました。H10年代の技術士の知名度は低く、九経局でも、知ってる方は少なかったのですが、当時の川崎支部長ご指導の下、あるべき姿、方向を成案して説明、こちらを向いて頂き、技術士会に多くの仕事を紹介して頂きました。“業務受託の基本方針は、国・自治体の仕事を連携して作業し、効率的に実現する”という事で対等の協力関係でした。業務開発委員会を組織化し、又技術士に相応しい仕事として工学鑑定を在京諸氏と立ち上げました。

北九州地区技術士会例会を江畑先生とご一緒に定例化し、現在330回（6月）、継続は力なりです。

川崎元支部長、故田中支部長のご指導を頂き、その後支部長として、中国、三峡ダムとの技術交流を行ったことは印象に残るものでした。第1回CPDは、「技術者倫理」で、会場は超満員、カルチャーショックを受けました。

2. 社会的存在感の醸成に向けた活動

H10年代前半では、建設系以外の技術士の知名度

は、低かったと思いますが、諸兄の御努力により、漸次たかまってきました。しかし、関係業界・官庁以外には未だに必ずしも認知されていないところがあるのは残念です。

昨年、九州の6つの大学・高専（九大、九工大、鹿児島大、福教大、佐賀大、北九高専）の学生、計360名と「日本のエネルギーの状況」をテーマに、集中講義をしました。ここでも、学生、指導教官から職業的優位性の質問が多く出ました。そして社会的存在感が薄いなーと実感した事です。自分の仕事をキッチリ遂行することは当然ですが、更なる社会的存在感を形成する努力が必要です。これができる、新会員の増加は加速するでしょう。

社会における重要なエンジニアリング課題に対して、技術士、技術士会は、その見解を示すことです。現在では、原子力の平和利用促進です。賛否両論併記で良いと思います。

技術士会の枠を越え、諸団体と連携し、社会に有益な情報を発信しては如何でしょうか。

3. 自立した存在に向けて

私は、75歳以降は、会社に帰属することなく、社会に貢献する仕事を選択できる人生を送りたいものと考えております。75歳で会社を辞めました。これには、それなりの経済的蓄えと実行する環境を整えることが必要となります。

75歳以降、KIGS¹⁾からの依頼で、出光佐三、安川敬一郎、安川第五郎のイノベーションとしての報告書作成、エネ庁の事業「高レベル放射性廃棄物地下処理」北九州work shop支援を行いました。CO2カウンセラー有志と、CO2削減を目指したNPO立ち上げ活動しています。また九州在住大学同窓会のお世話もしています。1): 北九州イノベーションギャラリー

今年も、前掲九州地域の6つの大学・高専での集中講義を予定しています。

4. おわりに

技術士は、「鋤をもって耕しながら夢を見る人になろう」（ソニー、井深大）、であり、「多くの良い人に会っていると、おのずと良い結果が生まれる」技術士会でありたいと思います。

(E-mail : izumitec@mocha.ocn.ne.jp)

企業内技術士の声

建設コンサルタントに所属する 企業内技術士に求められる役割

ながいわ のぶふみ
永岩 敦史
(建設・佐賀)



1. はじめに

頻発する自然災害や社会資本ストックマネジメントの重要性が広く認識された結果、長らく続いた公共工事は無駄でありコスト縮減を是とする風潮は影を潜めた感があります。地場の建設コンサルタントで調査・設計業務に携わる技術者である私の周りでも委託業務の受注件数は増加しており、労務単価の見直しと相まって利益率の改善が期待できる状況です。その一方、技術・ノウハウのある多くのベテラン技術者の退職や補修設計等メンテナンスに関する委託業務の増加等、技術者を取り巻く環境は刻々と変化しており求められる技術力も多様化しています。

このような状況を踏まえ、企業内技術士の役割について私の考えを述べたいと思います。

2. シームレスな技術力の向上

私が所属する会社は土木設計以外に上水道及び下水道の設計を行っています。通常、道路設計等に用いるコンクリート構造物は外からの力(外圧)に抵抗する構造であり、好気性の環境を想定しています。一方、上水道等では内からの力(内圧)に抵抗する構造であり、嫌気性の環境を想定しています。同じコンクリート構造物であってもそのメンテナンス方法は置かれた環境や利用目的によって大きく異なり、専門以外の課に所属する技術者とコンクリート構造物のメンテナンス手法に関して意見交換を行う事は、対象物に合致した補修設計を行う上で重要となる技術的バックボーンに大きく寄与しています。

これらの技術者と講習会やセミナーに参加して技術の習得を目指す事は、専門知識の習得と共に組織の横断的な連携を深める機会となっています。また、コンクリート構造物のメンテナンス工事を専門とする建設会社とコンクリート構造物の変状や損傷に関する調査方法や知見、使用する補修材の特性や施工方法について意見交換を行い、積極的に実務に沿ったノウスウの習得にも努めています。企業内技術士

として私の役割は、コンクリート構造物に携わる様々な分野の技術者と意見交換を行う機会を創出し、専門図書の購読等で得た情報提供を積極的に行う事で自らを含め会社に所属する技術者のシームレスな技術力の向上を図る事と考えます。

3. 技術・ノウハウの伝承

新人・若手技術者の技術力底上げと、ベテラン技術者の技術・ノウハウをスムーズに次世代に継承する事は業種を問わず緊喫の課題となっています。

私が所属する会社では退職技術者を積極的に再雇用し、新人・若手技術者へ技術・ノウハウを伝承する機会を設けています。特に全国有数の軟弱地盤で低平地の佐賀平野に広く分布する蓮池粘土や有明粘土、阿蘇火砕流堆積物等の地域特性を把握した調査設計業務の経験は非常に貴重であり、ベテラン技術者と新人・若手技術者の「ハイローミックス」によるプロジェクトグループの編成とOJTによってノウハウの継承を行う環境づくりを進めています。管理技術者等として実務を担当する私は、これまで習得した専門知識と経験を基礎とし、この取り組みを円滑に遂行する上で必要となるベテラン技術者と新人・若手技術者のパイプ役を果たす事が重要と考えます。

また、このような取り組みは地場コンサルに勤務する技術者が定年退職後に同じ職場に再雇用する事で今後迎えるべき「人生二毛作」の良い先例に繋がると考えます。

4. おわりに

社会資本ストックを効率的かつ経済的に維持管理を行う為には、それらに携わる技術者の不断の努力による技術力の向上が不可欠です。

ハードのみならずソフト面の整備による安心・安全社会の実現が強く求められる今日において、建設コンサルタントに所属する企業内技術士は、建設業の置かれた社会環境の変化を的確に把握し、これから必要とされる技術や情報の提供、意見交換の場を創出し、企業全体の技術者の技術力向上に資する事も求められています。

今後も講習会やセミナーへの参加などを通じて自己研鑽に努めると共に、企業内技術士として企業の発展と安心・安全社会の実現に寄与していく所存です。
(E-mail : n-nagaiwa@q-suiko.co.jp)

女性技術士の声

技術士としての 仕事への取り組み

よねみつ のりこ
米満 典子
(建設・熊本)



1. はじめに

私は、理学部生物科学科を卒業後、平成14年に建設コンサルタント会社に入社しました。生物科学科卒ということもあり、主に河川やダム、道路、農村等の公共事業に伴う野生生物の生息状況調査や保全計画の立案、環境影響評価などの業務に携わっています。

私の地元である熊本県には、阿蘇地域に代表されるような雄大な景観や豊かな自然環境、また、熊本市内などを潤す環境資源として地下水が存在します。これら自然環境の素晴らしさや、自然がもたらす恩恵を身近に感じながら、生活することができます。私は、この豊かな自然環境に魅力を感じ、自然環境調査の仕事がしたいと思い、現在の職種を選択し、技術の習得およびレベルアップに努めてきました。

2. 女性技術士として日ごろ感じていること

私には就学前の子供が2人いますが、出産・子育てを契機に、業務への取り組み方が変化しました。入社・退社の時間に制限が生じ、もう少し会社に残って仕事がしたいと思っても、タイムリミットを迎えてしまうことがありました。

現在では、与えられた時間内で効率的にやるしかないと考え、そのためには顧客の要求事項を的確に把握することが最も重要だと考えるようになりました。打合せや日々の連絡など、顧客とのコミュニケーションを通して、その時々々の要求事項を具体的に把握し、順位付けを行い、順次対応していくようにしています。コミュニケーションを図ることは、単に仕様書の数量を消化するのではなく、仕様書には記載されていない業務のバックグラウンド等の情報収集の機会にもなりますし、得られた情報を参考にすることでより深い考察が可能になると考えています。さらに、成果品作成時には、要求事項を整理し、とりまとめることにより、効率的に業務を遂行

することができると考えています。

また、もちろんのこと家族や会社の理解や協力も不可欠でして、現在の私の状況は恵まれていると思いい、日々、感謝しながら業務に打ち込んでいるところであります。

3. 業務の中で感じる技術士の役割

私の専門分野は建設環境で、いわゆる計画系の業務が多く、現地調査結果に基づき、計画、分析、評価などを行っています。自然環境を相手にしていますので、実際に施工された後の自然環境からの反応は不確実な部分が存在し、事後のモニタリング調査結果をフィードバックする順応的な対応が求められます。そのような中、業務の中で感じる技術士の役割としては、顧客の視点に立ち、専門的応用能力を発揮することだと思います。顧客の視点に立つということは、事業が計画から施工へ進行していく中で、立案した保全計画などがどのように具体化されていくかイメージし、利活用しやすいように考慮することだと思います。また、施工中に自然環境の保全に関する質問や助言などを求められた場合には真摯に対応し、場合によっては、設計や工事を担当する関係者へ保全に関する重要事項や留意点等を直接伝えることも必要だと思います。さらに、専門以外の方にはわかりづらい専門用語や、専門分野の内容を分かりやすく伝える工夫をし、事業を円滑に進めることも、技術士の役割だと思います。

4. 今後取り組みたいこと

野生生物調査は、植物、昆虫、魚類、鳥類、両生類、爬虫類、哺乳類などの調査項目があり、専門が細分化しています。私は植物の分野を専門としていますが、まだまだ知識の習得や同定能力のレベルアップが必要です。

持続可能な社会の実現のため、また、私が魅力を感じた自然環境を子供たちやその次の世代へと引き継ぐためには、自然との共生や生物多様性の保全等への取り組みが今後さらに必要です。そのような取り組みの一翼を担うためには、専門分野の探求とともに幅広い知識や技術の習得が必要と考えますので、今後も自己研鑽に励んで参ります。

(E-mail : yonemitsu@kyukai.co.jp)

修習技術者の声

I

日本の技術士を めざして

ふくやま たかよし
福山 隆義
(建設・福岡)



私は現在、建設コンサルタントとして主に都市・地方計画や造園設計など、ランドスケープに関する計画・設計を担当しています。

このランドスケープという分野の仕事は多岐に渡り、景観検討事業や土地区画整理事業、公園緑地整備や文化財保存整備等、様々な業務に携わらせて頂いています。この様なまちづくりの計画においては、その場の環境や資源、歴史や地域性を的確に洞察し、目的に即した提案力と共に、様々な専門知識や技術力が必要とされます。そんな状況において、技術士取得は是非成し遂げたい目標のひとつです。

戦後資源の乏しい日本が、今では世界を代表する経済大国へととなった大きな要因は、卓越した技術力と、ものづくりへの情熱だったということは疑いの

余地がありません。様々な分野で「Made in Japan」が高い評価を受けている中で、私も技術者として、「日本の技術士」の一員になりたいと思っています。

技術士になるためには幅広い専門知識や技術力のもとより、応用能力や課題解決能力が必要とされます。しかし最も重要なものは、技術士としての倫理観と誇りではないかと私は考えています。当たり前の事だと思いがちですが、専門性が高く、その分野を探究する程、常態化・慣例化して見えなくなる事も多々あるようにも感じます。どんなに素晴らしい技術であっても、目的や使い方を誤ると、人や環境に有害なものとなってしまいます。元来、技術は「人のため」を目的として発展してきたものだと思います。しかし、持続可能な社会や環境の実現には、動物・植物・土・水・大気・地球など、様々な視点での「〇〇のため」が必要ではないかと考えます。それにより結果的に将来の「人のため」の技術になっていくのではないのでしょうか。

今後は修習技術者として、「技術の日本」の中での技術士をめざすと共に、グローバルな視点のもてる技術者として社会に貢献していきたいと思っています。

(E-mail : fukuyama@zen-k.com)

II

アセットマネジメント

もうり とよじ
毛利 豊治
(建設・佐賀)



私が、地元の建設コンサルタントに勤務し始めて約8年が経ちました。過去の話をしめすと、私は大学の専攻は電気で、以前働いていた会社も電気関係の仕事をしており、今とは全く違う生活を送っていました。実は、大学受験時には隣県の私立大学の土木工学科に合格していましたが、親の負担が少ない地元の国立大学の電気科に進学することにしました。元々、土木・建築の方に興味はあったのですが、国立大学受験では土木工学関係より電気工学関係の受験が楽であったため、電気工学科を受験したのが本音です。今思えば、遠回りをしたものです。

私が、技術士一次試験の資格を目指したのも、受験資格に専門学科や専門資格の必要が無く、専門的な技術と知識、経験を取得することで、受験をする

ことができたからです。そして運よく合格することができました。

現在、わが社は微破壊・非破壊試験を応用したコンクリート構造物の健全度診断業務を展開中で、私はそのグループメンバーの一員として活動しています。我が国では、社会資本整備に伴う多くのコンクリート構造物が作られてきました。近年、トンネル内部のコンクリート崩落事故や、橋梁およびコンクリート構造物の経年劣化の問題が多発し、コンクリート構造物に対する安全性が大きな社会問題となっています。その結果、コンクリート構造物の品質管理、耐久性、維持管理の重要性が再確認されました。私は、新設されるコンクリート構造物の品質管理や既設コンクリート構造物の経年劣化を調査・点検することにより、コンクリート構造物の健全性を判断し、崩落等による大きな社会問題の発生を防止することに繋がっていくと考えます。

今後も、コンクリート構造物の健全度診断業務の経験をいかし、日々の業務で知識を十分に身に付け、技術士二次試験に合格し、地域に貢献できる技術者になりたいと思っています。

(E-mail : mouri@nisicon.co.jp)

私のチャレンジ

I

公民館建て替えに 参加して

みやむら すみたか
宮村 澄孝
(農業・熊本)



私の住む自治会の課題

私が住む菊陽町杉並台は40年前に開発された新興住宅地です。自治会世帯数は当初の80から、現在300を超えています。夏祭りや地区体育祭等を通して住民間交流が盛んな自治会です。

しかし、当初からの住民は高齢化し老老介護の世帯も増えており、近年入居した若い世代との交流や住民同士の助け合いの維持が必要となっています。

自治会の現公民館は、床面積約20坪と狭く、世帯数増加により総会開催や会員相互の交流もままならない状況です。このような状況を背景に、多目的利用可能なコミュニセン（以下コミセン）への建替えが発議され実行委員会が組織されました。

コミセン建替え実行委員会としての参加

委員会発足から5年目の本年4月に、(財)自治総合センターのコミュニティセンター助成金（以下宝くじ助成金）の交付決定を受けて、いよいよ建設事業の着手に至りました。私は2年目から参加し、事業計画の取りまとめにチャレンジしました。

このチャレンジを通して経験した住民主導の建替え事業の課題とその対策の経緯について述べます。

コミセン建設の課題

公立でなく自治会主体によるコミセン建設事業を実現する過程で以下の課題がありました。

- (1) 住民の多様な意見の整理と集約
- (2) 事業規模と各世帯の負担可能な金額
- (3) 建設用地の確保と法的規制
- (4) 建設費の概算と基本計画設計
- (5) 公的助成金による資金計画と自己資金確保
- (6) 金融機関からの関融の課題
- (7) 認可地縁団体設立による実印登録
- (8) 借金返済計画

課題克服へのチャレンジ

- (1) まず住民アンケートにより、卓球・ダンスなどの軽スポーツ対応の120名収容可能な大広間、10帖程度の談話室、災害時の炊出し機能を持つ調理室、多目的利用トイレ等の設置を基本条件としました。
- (2) 基本条件を基に床面積約55坪が必要となることが判明しました。また、各世帯の事前積立を2年

間毎月500円の徴収と、建設実現後は総計5万円の協力金拠出を自治会総会に諮り承認を得ました。

(3) 現況施設は町管理の公園内にあります。町との協議の結果、公園の同位置での建物設置許可及び占用許可を取得でき用地確保が可能となりました。

また、建築基準法の制約は審査機関との事前協議で建設可能であることを確認しました。

基本設計は3社による設計コンペ方式とし、事前に作成した評価表を基に、実行委員全員による評価採点により基本設計を採択しました。

(4) 概算事業費に対して自治会住民からの各世帯協力金の総計は約1000万円であり、資金が大幅に足りません。不足分を宝くじ助成金（通称）の交付を目指し、手分けして申請資料作成に取り組みました。

2年目の申請では、各世帯へ負担金の一括納付を呼びかけ、約900万円の自己資金を確保しました。

(5) 公的助成金交付が実現しても不足する資金は金融機関からの融資です。金融機関と相談した結果、融資には実印が必要であり、自治会名義では契約できないとの回答に、計画は行き詰まりました。

(6) 町と相談した結果、解決策として「認可地縁団体」の設立を助言されました。これは地方自治法（第260条の2）により、自治体の長（町長）が自治会に法人格を付与して実印登録を認める制度です。

会員全員が財産を共有する仕組みで、自治会規則の整備、総会決議、会員名簿と財産目録の作成等の認可の要件を僅か3ヶ月で整備して認可地縁団体となり、実印を得て融資可能となりました。

(7) 融資の返済期間は10年間とし、その財源は、リサイクル回収による町からの助成金と、自治会の運営費の支出抑制による自治会会計から引き当てによる計画とし、自治会総会で承認され、返済計画もクリアできる見通しが立ちました。

宝くじ助成金（通称）交付決定と今後の活動

いよいよ来年3月の完成を目指し、建設事業の着手段階に入りました。現在は詳細設計を委託中です。

本稿が掲載される頃には工事請負業者が決定して現況施設の解体工事が始まっていると思われます。

今後は、新施設の維持・管理運営方法、本施設を拠点とした高齢者とのふれあいや子育て支援などの交流事業の推進や活動組織の創設などを通して、地域コミュニティ活動へのチャレンジに関わる所存です。



完成予想図

(E-mail : miyamura@souken-co.co.jp)

Ⅱ

企業内技術士の 田舎暮らしへの挑戦

くわはら てるお
桑原 照男

(建設、総合技術監理・熊本)



【冗長とチャレンジ】

15年ほど前に技術士受験の小論文の添削・指導していただいた先輩技術士から、「私のチャレンジの原稿をお願いします」のメールである。ここは、知らぬ存ぜぬでは通らない。そのときに一緒に挑戦していた同期の顔と、寝るまもなく一生懸命に書いた論文を「わからん・冗長です！」の一言で片付けられるむなしさ、時間に追われ書き直した日々が思い起こされる。だから書いてある意味の「冗長」の二文字にチャレンジして今の私がある。

【リスクと一人よがり】

現在、企業内技術士として建設会社の安全環境品質部に席を置いて安全・環境・品質マネジメントシステムの維持管理を行っている。

他方で、土・日は水稻を2ヘクタール(20反)耕作と趣味でチャボを50羽ほど庭先で飼育している。毎日朝5時半から鶏舎の掃除、えさやりが日課である。

当局によるとチャボは家畜ではなく鑑賞用小鳥ということで取り締まりの管轄外とのことである。それでも鳥インフルエンザにかかるリスクはある。広い場所で日光にあたり、雑草を食べて、親子兄弟でのびのびと育っているから、鳥インフルエンザに対する免疫はあるはずだ？との一人よがりではチャボを飼っている。

【悲しい目と防護服】

先ごろ、自宅から5kmほどの離れた鶏舎から鳥インフルエンザが発生し、テレビ・新聞で大きくとりあげられた。建設会社も埋設処分、通行車両の消毒に迅速に協力を行った。私も二日目の早朝より埋設現場に、二重の防護服、マスク、防塵めがね、ゴム手袋、ゴム長靴の完全防護服姿で重機の世話役係りに駆りだされた。殺傷処分されるニワトリもかわいそうであるが殺傷処理しなければならない人々もつらい気持ちであった。

作業中に、異常事態を察しているニワトリさんと目が合うこともたびたびであった。目が合うたびに

我が家のチャボと重なる。独特の雰囲気の中で人海戦術を行っている公務員に頭が下がる思いであった。

【チャボと良き時代】

我が家で飼育している鶏はすべて肥後チャボである。チャボは鳩ぐらいの大きさで鑑賞用に飼育されている。最初2羽貰い受けた雌雄のチャボが10年あまりで50羽ほどに増えている。庭先には、真っ白、真っ黒、灰色混じり、茶色と色とりどりのチャボが雑草をついばんでいる。チャボは、卵を10個ほど産んだらすぐに抱卵する習性があり、他品種の卵の孵化を頼まれることもある。

我が家の鶏舎では、数羽が常に抱卵し、まわりで孵化したひよこがえさをついばんでいる。そこには、のどかな良き時代の田舎の風景がある。

【有精卵と終の棲家】

チャボの卵は店頭のS玉よりさらに一回り小さい。卵はすべて有精卵である。黄身は、えさにより薄緑、濃黄色とバラエティに富み、弾力がある。えさは、くず米や庭先の雑草である。時にはご馳走のミズもある。

我が家のチャボは「終(つい)の棲家」付きである。昔は卵を産なくなった鳥は、盆正月にご馳走になっていた。私は殺生できない半人前の農業人(ひと)である。

【リスクアセスメントと本質安全】

3年前にインフルエンザにかかり、仕事に支障をきたし、それ以降は予防接種を行っている(リスクの低減)。我が家のチャボ達を処分すれば、我が家から鳥インフルエンザが発生するリスクはゼロになる(本質安全)。

一方、毎朝4時過ぎの一番鳥の鳴き声も消え、朝夕のチャボとのリスクコミュニケーションも無くなる。

【リスク低減とチャレンジ】

ニワトリさんは、日光を十分に浴び、新鮮な雑草、残飯の偏らない食事と愛情で心身健康である。昔ながらの庭先でニワトリがえさをついばみ、朝早くから一番鳥が鳴き、盆正月にはニワトリの大根煮を食べる生活を目指し、健康でばけない人生を送りたいものです。

最後までこの冗長文にお付き合いしていただいたことが「私のチャレンジ」です。ありがとうございました。

(E-mail : te-kuwahara@asagiri.jp)

平成24年九州北部豪雨における土砂災害について

むらおか
村岡
(建設・大分)

かおる
馨



1. はじめに

平成24年7月12日午前6時41分、気象庁は大分・熊本両県に対し、「これまでに経験したことがないような大雨」という気象情報を、運用開始後、初めて発表しました。豪雨は、大分・熊本等九州各県で大きな被害をもたらした「九州北部豪雨」と命名されました。当時、私は大分県砂防課長の職にありましたが、県西部での豪雨による土砂災害について考察したことを今回、報告させていただきます。

2. 被災後に感じたこと

北部豪雨災害以前にも、6/30-7/2と7/3-7/4の2回に渡り豪雨災害が発生しており、最終的には、大分県内における土砂災害は71件にのびりました。しかし、熊本県の被害の甚大さと比較すると、自分が予測するほどの規模、件数ではなかったと実感したことも事実でした。この違いは何なのか。技術者として、その検証作業が必要であることを思い、関係者と共に情報収集・分析を行いました。

3. 当時の気象状況

広範囲で連続発生した豪雨の状況です。

- ① 6/30-7/2：日田市椿ヶ鼻の160mm、由布市湯布院の120mm等、各地で100mm/日を超える雨でした。
- ② 7/3-4：中津市耶馬溪で時間雨量91mm、日雨量250mm等、観測史上1位を記録する豪雨となり、各地においても日雨量200mmを超える状況でした。
- ③ 7/12-14：阿蘇市乙姫では108mm/h、289mm/3hの豪雨となり、気象台は「これまでに経験のない大雨」という短文気象情報を発しました。九州各地でも、総雨量が福岡県八女市649mm、大分県日田市462mmに達する豪雨となりました。
- ④ 阿蘇市乙姫ではバックビルディング現象により、短時間雨量、総雨量ともに大分県と比較すると約2倍になる豪雨であったことが大きな特徴でした。

4. 代表的な土砂災害箇所とその特徴

- ① 志谷川（日田市前津江町）：これまで当県で発生した中で最も大きい土石流の一つで大量の土石が1.6kmに渡り流出しました。崩壊ブロックは古い小規模な崩壊地形。凝灰角礫岩と溶結凝灰岩の境界面で間隙水圧が上昇。古い崩壊地形の表流水が崩壊ブロックに流れ込み飽和を助長し、末端の土塊が流出し土石流化したものと想定しました。
- ② 柿坂地区（中津市耶馬溪町）：斜面長70m、幅25mで崩壊した大規模な崖崩れ災害です。崩壊素因は、斜面上方の強風化凝灰角礫岩、凝灰角礫岩と安山岩の地質境界、恒常的な斜面上部の地すべり変状、節理面が発達した安山岩です。そこに、背後からの湧水と強風化凝灰角礫岩の地すべり崩壊の誘発が崩壊誘因となり、大規模な崖崩れ災害になったことが想定されます。
- ③ 竹田地方紙漣（かみすき）地区を代表とする崖崩れ災害：当該地域を代表する阿蘇3溶結凝灰岩が広範囲に分布しています。被災箇所の上部に強風化土砂、下部に非溶結～弱溶結凝灰岩が確認されましたが、このような地形変化点や地質の境界面では豪雨に対する抵抗性が小さく崩壊を起こしやすいと想定しました。

以上のように、当県では阿蘇地方に見られた火山灰質だけの表層崩壊が確認できていないことがその大きな特徴でした。

5. まとめ

- ① 県内では、総雨量200～300mmで被害が増加傾向になる。また、40-50mm/h、80-100mm/3hが警戒を判断する目安となる。
- ② 阿蘇地方の災害は、カルデラ壁や外輪山との地形条件やカルデラ壁と南西の気流との関わりが強い気象条件等、局地性の傾向が強い。
- ③ 当県北西部は凝灰角礫岩の斜面（35-40°）を被覆する崖錘が崩壊しやすい。また、南西部は急崖や急斜面下方の緩斜面（10-15°）が流動崩壊しやすい。
- ④ 難透水性地盤上位に透水層があると上位側の未固結層が豪雨で崩壊しやすい。

6. おわりに

今回の豪雨では、以上のように考察をまとめましたが、今後もこれまでのデータ、これからの土砂災害情報の収集・分析を重ね、更なる検証が必要だと考えています。（引用：H24年度砂調委第5号土砂災害発生検証業務より）

森林林業の現状と課題 — 新たな取り組み

みどり研究部会長 たなか こういち
田中 孝一
(森林・福岡)



「WOOD JOB! (ウッジョブ) ～神去なあなあ日常～」という林業を描いた映画がヒットし、九州本部CPDで、宮崎県木材加工技術センターの飯村豊所長が講演されたのを機に日本の森林林業の現状をデータ中心に俯瞰してみたい。

全世界の森林面積は40.2億haで陸地面積の31%を占め、年間520万ha減少(2000～10年の平均)しており、アフリカ、南米で減少幅がおおきく、ヨーロッパは微増、アジアは中国の大規模植林により増加に転じるが東南アジアは減少、北米オセアニアは増減なしである。

木材生産量は35.4億m³で、アジア、アフリカで過半を生産しているが発展途上国では大半が薪炭として使われるため、産業用木材は主にヨーロッパ(ロシアを含む)、北米で供給され、林業は先進国の産業となっている。輸出入量は3.1億m³(データは2011年のもの、以下同)

日本の森林面積は2,510万ha(国土面積の67.3%)で、49億m³の蓄積を有し、年間約8千万m³増加している。人工林(人間が植林した森林)は1,000万haにのぼりその77%が伐採適期の35年を越えており、日本の森林はかつてないほど充実している。

国内の木材需要量は7,230万m³で国内生産量は1,937万m³、輸入量は5,336万m³で自給率26.6%となっている。1964年の木材輸入全面自由化以来、丸太価格は国際価格となり円高により低迷している。現在はスギ中丸太 11,400円 ヒノキ中丸太 8,500円 ベイツガ 24,000円で1990年頃を境に外材より安くなっている。(スギ中丸太とベイツガの比較)

森林面積は過去40年変化なく、森林の木材蓄積量は1980年に比べると24億m³増加し約2倍になった。需要量は66%、丸太価格は25～30%、生産量は56%に低下し、自給率は5.1%減少している。2000年と比較すると需要量、価格とも低下しているが、生産量は107%、自給率は8.4%増となっている。原木価格はここ5年ほど横ばいで、2013年度は消費税の駆け込み需要と円安で値上がりしている。また、

新規着工住宅の木造率は10ポイントほど上昇。木材価格は低迷し、依然厳しい状況だが、生産量はやや上向いている。

課題はこの充実した森林資源を有効に利用し、持続的森林経営の確立と山村の活性化を図ることである。国、県、自治体は森林にさまざまな対策を講じており、国は2010年に10年間で木材自給率50%を目標とする森林林業再生プランを策定した。また、同年度に公共施設等の木造化を進める法律を施行した。九州は宮崎県(木材の生産全国2位、1位は北海道)をはじめ熊本、大分、鹿児島がトップ10を占める木材生産の先進地となっており各県独自の振興策を取り入れている。

福岡県では2008年度から森林環境税を導入し、長年間伐されていない森林約6万ヘクタールを10年間で整備することとしている。さらに、木材の本格的利用のため、平成26年度から「主伐で元気にプロジェクト」事業を新設し、主伐(収穫のための伐採)した森林所有者等に原木1m³当たり800円を助成することとした。過去主伐に対し支援する制度はほとんど例がなく、この事業が軌道に乗り、森林林業が伐採→植栽→保育→間伐→伐採の適正な循環を取り戻し、山村地域が活性化することを期待したい。

近年木材のよさが見直され、構造材として集成材が一般化し強度、耐久性が保障されたこともあり、新築住宅の木造率が上がっている。また、学校等では木造の校舎、机いすが他の材料に比して心身両面で教育効果が高いことから木造校舎が促進されている。このほか、バイオマス、石炭火力発電の木材混焼、公共事業の木造新工法開発など利用が進められている。

木材の利用拡大と課題解消のため、技術者は木材の品質確保や強度算定、新たな用途開発、林内路網等インフラ整備など協力できる分野は多い。九州では橋梁工学研究会「KABSE」での研究など木材利用の研究開発が進められているが、さらに広範な技術士のご支援、ご協力をお願いしたい。

(E-mail : ita-ko.tanaka@nifty.ne.jp)

ご 案 内

平成26年度第2回CPDを平成26年7月26日に開催いたします。

詳しくは九州本部ホームページをご覧ください。

ミニ特集 『私の仕事の流儀』

私の仕事の流儀

青年技術士交流委員会

委員長 もちだ 持田 たくじ 拓児
(建設・福岡)



私の現在の仕事は、【技術職】と【経営職】です。

【技術職】の場合、次の3つに対して徹底的に取り組んでいます。

- ①自分の仕事に誇りを持つこと。
- ②自分の仕事に責任を持つこと。
- ③徹底した現場主義を貫くこと。

【経営職】の場合、次の3つを意識して取り組んでいます。

- ①職場全体が仕事を進めやすい、働きやすい、明るい環境を常に作ること
- ②社員一人一人がプロ意識を持って仕事に臨むようにすること

③社員とその家族が路頭に迷わないようにすること
私が最も大切にしていることは、“失敗がチャンス”だということです。仕事において、失敗やミスが発生したときに、その人の本当の力が試されると感じています。

- ・失敗・ミスをすぐに受け入れ、認めることが先ず大切です。
- ・発生原因は何か？
- ・応急と恒久の対処方法は何か？

全力で、早急にかつ徹底的に解決する事が何より大切だと感じています。

30歳位の頃、大先輩より「苦勞する人は、一生苦勞する。」と、言われました。仕事とは、苦勞せずに決してできるものではなく、その苦勞が仕事を運んでくれる大切なものだ、と、最近やっと思えるようになりました。

最後に、私自身、「あの人に頼んで良かったと思われる仕事をする。多くの人から頼られる、相談される存在になりたい。」と、日々精進しております。

(E-mail : t-motida@wakou-tisitu.co.jp)

向上し続ける 技術者を目指して

さかた 坂田 かずのり 一則
(金属、総合監理・北九州)



1. はじめに

私は富士岐工産株式会社(資本金9800万円、従業員数約500名)に勤務する企業内技術士です。昭和51年4月に入社以来、溶射・溶接等の表面処理の研究・技術開発及び生産現場の管理に携わり、早や、38年が過ぎ去りました。

技術士(金属部門)資格は平成12年3月に、総合技術監理部門は平成17年3月に取得いたしました。

2. 仕事の流儀(プロフェッショナルとは?)

バスケット好きの子供の影響を受け、漫画家の井上雄彦氏が描く『SLAM DUNK』は大好きな漫画の一つです。高校バスケットボールを題材にした少年漫画作品です。主人公の桜木花道は不純な動機でバスケット部に入部しますが、練習や試合を通じて徐々にバスケットの面白さに目覚め、才能を開花させるストーリーです。

著者の井上雄彦氏への「プロフェッショナルと

は?」との質問に、「プロフェッショナルというのは、向上し続ける人、と思います。」との言葉に私は、共感を覚えます。自分自身に置き換えれば、自分が専門とする分野で、向上し続ける意欲が無くなれば、プロフェッショナルエンジニア(PE:技術士)でなくなると考えます。

現在、私は58歳です。そろそろサラリーマン生活の着地点を考えなくてはいけない時期ですが、興味がある技術分野で向上するために、今年5月にスペインのバルセロナで開催された国際溶射会議(ITSC2014)で、口頭発表とポスターセッション発表を行いました。

また、平成25年度は、

- ①平成24年度ものづくり中小企業・小規模事業者試作開発等支援補助金(経済産業省)
- ②中小企業産学官連携研究開発事業補助金(公益財団法人北九州産業学術推進機構)
- ③IST研究FS事業(実用化試験枠)(公益財団法人福岡県産業・科学技術振興財団)

の3件の補助事業に採択いただき、それぞれのプロジェクトリーダーを務めました。まだまだ、十分な成果を出すまでには至っていませんが、勤務する会社の技術の向上のみならず、溶射業界の発展に貢献できるように行動しています。これが、私の仕事の流儀です。

(E-mail : sakata@fjk-kk.co.jp)

上司からまずお手本を！

なんり まさる
南里 勝

(建設、総合技術監理・佐賀)



1. まず上司から部下へ

私は県の現地機関の所長をしているが、問題が行き詰ってからの相談事が多い。これは私の職場だけではないようだ。4月下旬に幹部研修があった。この研修は職場のコミュニケーション対策であったが、受講者（ほぼ所属長）の多くから「情報がすぐに上がってこない」、「行き詰ってから相談に来る」などの意見である。研修講師は他の自治体や企業でも研修を行っており、多くの職場でも同様であるという。

対策として部下からの相談を待つ前に、上司から話かけることがいい結果を生むとの講師の助言であった。まずは上司がお手本を見せることが今風の仕事のやり方なのだろうか。

2. 仕事は原則論+α

昭和50年代後半に県職員となった当時は、仕

事に余裕があった。まずは先輩方の手伝いをやり、現場では業者や地域の方と打合せや協議を行い、技術者として公務員としてノウハウを習得する機会が多かった。今は若い人や新採は即戦力である。現場に行く機会も先輩同僚との議論も減り、「ON THE JOB」ができた余裕のある職場環境が変わった。一方、各種の研修に参加して技術を習得しようとするが現実の仕事では余裕がない。現実を見て、先輩同僚に尋ねて、自分で考えて、知恵を生み出す力を養う環境を作ることが肝要である。

昨今、官庁では原則論だけで仕事が進まない場合がある。行政の基本は法律や条例、技術基準などを当てはめて仕事を進めるが、複雑な事例が多くなり、原則論+独自の幅広い解釈力で対応する事例が多くなった。

人の価値観が多様化する現代、技術者として基本力と知恵や経験から生まれる独自の余裕のある解釈力（判断力）が必要である。このような仕事の進め方も、上司からまずお手本を見せる時代であると感じる。

(E-mail : nanri-masaru@pref.saga.lg.jp)

私の仕事の流儀

長崎県支部
副支部長 かわむら あきのぶ
川村 昭宣
(建設、総合技術監理・長崎)



今まで上司・先輩の方々から折に触れて言われ続け身についた事や、努力して来た事等を「私の仕事の流儀」として記述させてもらう事とします。

まず初めに「出来ないと言わない。どうすれば出来るかを考える。」という事です。

非常に困難な問題に直面したときや、今まで担当した事がない業務をするとき、「出来ません」と言いがちですが、「どうすれば出来るのか?」「どのような条件がそろえば出来るのか」という風に考える事で、解決の道が見えてきます。「諦めたら終わり。人間は出来ないと思ったら何も出来なくなる。出来ると思えば何でも出来る。」という強い意欲・ヤル気を持ち続ける事が重要だと思います。

仕事上で今まで何回も困難な場面に遭遇しましたが、悩み考え続けていれば、必ず何らかの解決方法が浮かんでくる事を実感しました。決められた仕事を、決められた通りにやるだけでは技術の進歩があ

りません。常に何か新しい方法、考え方を試みる様に努力して来ました。失敗した時は最大限頭を使って考えますし、失敗を乗り越え、次の成功に生かして行く粘り強さ・底力が養われます。失敗を乗り越えた時に技術力が進歩し、向上すると思います。「どのような困難な場面に遭遇しても、つらい仕事から逃げず、どのような努力をして、それを克服したか?」、「失敗を恐れず、新方式に挑戦する」事が大切です。

また「与えられた仕事を天職と思い、その仕事を好きになる」様にしてきました。

船の設計が専門でしたが、入社20年後に社内の橋梁関連部門に職場変更になり、設計だけでなく、現地工事も担当しました。当初はちょっと途惑いしましたが、今では非常に良かったと思っています。技術士も「船舶海洋部門」ではなく「建設部門」で取得しました。「1つの分野で1万時間努力すれば、その道の権威になれる。」とされています。好きな仕事なら努力をする事が楽しくなります。与えられた仕事为天職であり、仕事を好きになる事、好きになる努力をする事、毎日のちょっとした努力を続ける事が大切と信じています。

(E-mail : ak-kwmr@mx.cncm.ne.jp)

ミニ特集 『私の仕事の流儀』

古稀を迎えての流儀 「一意専心」

まつお ひろし
松尾 洋志
(農業・大分)



もうすぐ古稀を迎えようとしている5月の連休明けに広報担当の寿福氏より、ミニ特集「私の仕事の流儀」への原稿依頼メールが入った。文章作成が決して旨いわけではないが、前広報担当として、折角の100号記念と古稀を迎えての記念にと快諾をした。しかし、ふと考えてみると、法律を読み切れない行政マンとしての37年間、力学を習得していない技術士としての10年間、現場経験不足・指導力不足の労働安全コンサルタントとしての6年間でただひたすらに過ごしてきた小生にとって他人に語るほどの「仕事への流儀」などないことに気づかされた。

優れた才能・能力や知恵もなく、自分らしくというほどの自分の型もないものですから、ただひたす

ら県職員として、農業土木技術というものを通して県民への奉仕が何なのかを考え、出来るだけのことをでやってきた。

背伸びをせず、卑下もせず、傲りもせず、媚びもせず、技術が持っている「ひと」への貢献というものだけを考えてやってきたかったが、それが出来たのかも、それほど綺麗事を言える自分であるのかも自信ありません。

ただ言えることは、一步一步無理をせず、自分にとっては遠い道程でありながらも、今という足下を固めていくことは重要で、そのことは少しは出来たのかと、そしてこれからも今までと変わることなく、持てる力で人々が安全・安心で快適な社会で過ごせるような社会づくりに少しでも貢献できることを願って、またこの超高齢化社会を乗り切るために、生涯現役で働き、「元気なまま死ねる」ように「一意専心」で、喜寿、米寿、白寿への道程を、これからの幾十年かを、過ごしていきたいと思っていることが、贅沢かもしれないけど「仕事への自分流儀」なのかもしれません。）

(E-mail : 45ws3v@bma.biglobe.ne.jp)

踏 査 が 原 点

いさみ ひでただ
勇 秀忠
(建設・熊本)



流儀とは仕事のやり方となるであろうが。あまり難しい内容はお伝えできないので、私のことを少し述べてみたい。

いまや昔流ではなかなか仕事に対して通じるか疑問もあるが、「技能」と「技術」の違いを論じ、今現在、管理技術者として従事していることから、若い技術者に少しでも参考になるのであれば幸いである。

まず、技能とは一子相伝といわれる昔流の弟子にそのやり方を伝授することでその技能は受け継がれてきたと思う。他方、技術は物事を遂行するに当たり、既存の技術（経験工学）を応用（創意・工夫）して新しいこと（やり方）を提案することにある。ある意味考察力となろう。その点を十分踏まえながら業務遂行をなすならば、おのずと特色ある報告書（成果）につながるものと考えます。

また、技術士の観点からは、基礎理論と経験工学

の補完的意味合いを理解認識する必要がある。さらには、これから技術士を目指す技術者には技術士法第2条の意味を自分なりに考察・探求してもらいたい。

前段が長くなりましたが、以下に橋梁補修委託業務などを例に挙げて仕事の流儀（原点）としたい。小規模な橋梁の補修委託業務などは、橋梁数が数本となるケースが多々ある。工期内に点検する必要性があり、多大な時間をかけて、念入りに調査することを否定するものではないが、鉄筋コンクリート桁やプレストレストコンクリート桁あるいは鋼桁など、橋梁の特徴から重要な点検箇所に着目して点検することも大切であろう。劣化損傷に応じた補修案を比較検討（経済性、施工性、安全性、品質など）して、独創的な最良の補修対策を提案する必要がある。

特に、コンクリートの経年劣化や鋼による錆などに関する補修方法も多種存在し、その劣化損傷に応じた最適な対策案が補修後の橋梁の寿命にもつながる。

現場踏査はその橋梁の劣化要因などがある程度把握する決め手となる声なき声を聞く（診る）一番大切な行為であることから、踏査が最も大事な原点（流儀）と考えます。

(E-mail : isami-h@kowa-kk.co.jp)

私の仕事の流儀

ごとう しげとし
後藤 繁俊

(応用理学、建設、総合技術監理・宮崎)



私は九州を主なフィールドとする地盤技術者です。地質調査の経験は大学時代から40年近くあり、建設コンサルタント業も30年以上続けています。

以下に、業務を行う上で日頃から気をつけている事項について記します。

＜現場での事故＞地質調査業の基本である調査ボーリングは、建設業界でも危険な作業の一つです。このため、オペレーター（機長）が焦ったり、イライラしたりしないよう作業工程や現場の安全衛生環境に気を配っています。

＜成果品のミス＞地質調査の成果は、報告書とサンプリング試料で判断されます。その中でも地層境界の鑑定ミスは重大な事故に繋がります。そのため、ボーリング柱状図は極力定量化して明解で誤解のない表現を用い、場合によっては所要の土質試験のほかに

X線回折や火山ガラスの屈折率試験などを依頼します。考察では、問題となる事故や災害のリスクについて根拠を明確に示し、具体的な対策工を客観的に検討するよう心掛けています。

＜地質図の作成＞クライアントの設計書項目には地表地質踏査が計上されていないことが多いのですが、現地状況の把握も兼ねて地質の踏査を行います。特に、調査ボーリングで確認された重要な地質境界は、極力近傍の露頭で確認します。長年ご指導を賜った大先輩は、地形をあてにせず確認した露頭の地質と走向傾斜等の測定データのみによって地質図を作成しましたが、私は精度向上のためリスクを受容しつつ地形を考慮した地質図を作成しています。また、作図は感性より正確さを重んじて手書きより細かい作業が可能なCADを用いています。

＜技術の継承＞社会資本整備に携わる労働の汗を流すことに生きがいがあるよう、技術士等の資格取得の指導時に、これまでの経験や最近のトピックスを交えて、現場でのスキル、成果品のミス防止策、技術者倫理などの継承を行うようにしています。

(E-mail : ad.1957.goto@ac.auone-net.jp)

協賛会員の声

技術が命

～当社の事例～

日本地研(株) てらち まもる
寺地 守
(建設・福岡)



「誠実、親和、研究」これが当社の社訓です。

昭和30年建設事業の最上流“地質・土質”の調査会社として創業、またこれを生かした法面補強の工事など手がけて今年で59年を迎えます。先人は社訓に見るように日夜、技術力アップを目指し、技術士18名（うち日本技術士会会員6名）が勤務するようになりました。ここで社の技術研鑽を紹介し、今後の技術士会への期待を述べてみます。

四月になると毎年、新人が数人入社します。ほぼ1週間をかけて、社の総務、営業に始まり専門分野の土質試験、地質調査の机上、試験室、現地、そして請負工事中の工事現場など具体事例を学びます。講師陣には分野毎に官公庁や学会で発表経験のある社の部課長らがあたります。

年度初めは新規受注が動き出す前で前年度業務も一通り終了し、充電の時期です。業務を通じた成功・失敗事例など社内で発表しあいます。悩んだ箇所などテーマには事欠きません。また、若者の発表経験、質問は専門分野の学会、発表会への参加訓練ともなり、優秀なものはそれらへ推薦されます。また終了後の懇親会でチームの一体感が育ちます。

夏、技術士二次試験、秋、一次試験と続きます。

社内では、試験対象者へ機会を見つけて指導がなされます。この間、各機関が実施する講演会、見学会へは業務を分担しあい参加を促し年間の研鑽実績を高めていきます。

近年、インフラ整備、維持管理への認識が高まる中、従事する若手職員の育成とともに、工事、業務を問わず技術者本人の資質評価としてCPD実績が評価されるようになりました。専門分野を深く掘り下げ、幅広く視野を広げるうえで、日本技術士会のCPDは協賛会社にとって参加無料で非会員も推薦出来る良質の研鑽の場です。日本技術士会が学協会を先導し地域の技術力アップに一層寄与されることを期待します。（E-mail : terachi@chiken.co.jp）

公益社団法人 日本技術士会
理事 さ たけ よしろう 佐竹 芳郎
(建設、総合技術監理・福岡)



1、はじめに

季刊誌「技術士だより・九州」は平成元年8月5日に創刊号が発行され、25年後の今年7月発行で100号を迎えますが、大変喜ばしく思うとともに、広報委員会や関係者の皆様の今までの努力に対して敬意を表します。

「月刊技術士」は各部門からの技術論文が中心で構成されていますが、「技術士だより・九州」は会員への情報提供、会員相互のコミュニケーションに重きを置く構成ですし、最近では外部との交流も目指しています。

2、感想

私の感想では、「月刊技術士」よりも、多様な会員の声を聞くことができ大変面白く読めています。第

82号（平成22年1月）からは目次が付き見やすくなりました。

また過去の企画では、「私のチャレンジ」が好きでした。例えば毎年120冊の本を読む等色々なチャレンジのことが書いてあり多くの刺激を受けました。その後の企画では、「ミニ特集」が好きです。例えば「座右の銘」を会員に書いて頂く等、色々なテーマの特集をしています。

また、工夫しながら職種・経験・立場の違う会員の声、例えば「女性技術士の声」などと区別して集め、多様な会員の声を段々増やしてきているのも良いことだと思います。

3、今後への期待

これからも、①魅力ある内容づくりをする、②技術士にとって欲しい情報を掲載する、③啓発する内容を載せる、④多くの会員から原稿を集めるようにする、⑤開かれた技術士会を目指した広報活動（外部の方への原稿依頼、官公庁等への配布とコミュニケーション等）をする等に注力していった欲しいと思います。

(E-mail : satake@qscpua.or.jp)

元九州支部長

かわさき みちかず
川崎 迪一
(建設・福岡)



平成9年の何月だったか思い出せませんが、建設省OBの帆足先生はじめ多くの人から支部長選挙に引っぱり出されました。今から17年も前のことで、以後2期4年間緊張と誠意をもって、会員のご協力のうえ務めさせて頂きました。

就任そうそうの懸案事項が九州支部の財政問題でした。それまで数年にわたり「九州技術士センター」の受験対策講座の責任者として成果を上げられていた「K」氏（現在故人）が、九州技術士センターの分を含めて一括下請もやりたい。センターのテキスト等も自分が担当委員長時代に作成したものである。センターのご協力が得られないなら差し止めも考えたい等の発言があったと聞いておりました。

結果的に技術士センターで実施していた受験対策

講座の受講者が半減することになり、歳入欠陥となる。これをカバーするには会員増強によるしかないわけであり、きめの細い対応策を考えて一本釣りまで検討されました。

支部長在職中のメイン・イベント

- ・第24回技術士全国大会（平成9年度）
- ・支部事務局の移転

平成10年5月、現在の博多駅直近の至便の場所です。2階・約10㎡、甲斐現本部長が部会長当時の成果である。

- ・山峡ダムの見学（中国）

平成11年度当時、第2部会長の清水先生のご努力により福岡総領事館のご支援を得て実施、大成功だった。

- ・第30回日韓技術士会議

最後に私がかねてから思うことであるが、支部に個人の賛助会員を認めて、会費も5,000～8,000円/年と他の学協会なみとして会員の増強を計る一助にすることを提案したい。

公益社団法人 日本技術士会
九州本部 参事 小出 剛
元理事・業務委員長 (農業・福岡)



1959年3月 社団法人日本技術士会が正式に設立され、我が九州本部の前身九州支部は1965年6月に創設された。この間、会員数の増加と共に皆さんと一緒に会の伸展、九州の発展、技術士の啓蒙に努め、今日のように甲斐本部長体制の下、安定感のある九州本部の現状となった。この間、数多く先達の努力があったればこそ、の気持ちとして心から感謝の意を忘れてはならない。

技術士会での私の行動を振り返ると、1967年には青年技術士懇談会(全国版)を東京で10数名の仲間と立ち上げ、1991年九州に帰ってからは、まず第五部会長(現在のみどり部会)、2000年の第30回日韓技術士会議福岡大会での司会と池田元支部長と共にテクニカルツアーの企画実行を行った。このほか技術士全国大会や、産官学と技術士の交流会、創立50周年記念事業でのコーディネーター等々、重荷の業務にも携われたことは深い思い出と喜びでもあった。この間、2001年には、日本技術士会の理事選出馬、当選。2003年には同理事に再選され、地方

出身理事では初めての業務委員長を拝命し多忙を極めた。理事任期満了後は総務委員会委員に選任され、理事会審議事項等の立案・討議も行った。これまでの内容は逐一「技術士だより」で報告を行ってきたところである。理事・業務委員長 時代に関係した主な項目を順不動に列挙すると、

- (1) 技術士ビジョン21の作成
- (2) 全会員から、技術士として会と国への要望事項をアンケート実施

集約した結果を①即実行可能な事項、②1～2年検討期間が必要な事項、③中長期の検討を要する事項、の三種類に区分し、委員会決定事項、理事会決定事項、として、所謂「直ぐやること」は文科省を窓口各省庁・機関に要請・意見聴取・改善等、事例として、CPDの運営、JABEE審査員の資格取得促進等を行い、中長期については今後の手法も付加して次期業務委員会に引き継いだ。

- (3) 年会費を24,000円から20,000円に変更

私の理事会での発言もあり、会費問題特別委員会が設置され、年会費を24,000円から20,000円に変更が実現となった。現役リタイヤーの技術士や若い方々の負担軽減により会員数も漸増し、中味の濃い技術士会ともなって来ていることは嬉しいことでもある。

(E-mail : k.atlas@osu.bbiq.jp)

活き活きした 技術士の支え

元九州支部顧問
前広報委員長 完戸 鵠
(農業・福岡)



「技術士だより・九州」が100号になった。年4回の季刊だから、創刊は25年前、平成元年のことになる。当時、私は九州支部〔現在は本部〕の広報委員長をつとめていた。九州地区の技術士のみなさんにいろんな情報をお伝えするのが役目であったが、その方法として生み出したのが「技術士だより」であった。日本技術士会本部の動きや意向の伝達、また九州支部の方針、各県内技術士活動の実態をまとめた情報誌を、季刊として出そうと考えたのである。

実は私は若い頃12年間、九州を販路とする農業雑誌の編集を続けてきた。だから、「技術士だより」についても、企画、原稿まとめ、編集についてはそう苦労することもなく作り続けることができた。当初は、B5版20ページ程度、黒色刷りの謄写印刷で、

巻頭言、私の提言、行学会合・部会報告、会員ニュースなどをまとめる、小冊子であった。

その後、印刷が活版印刷、表紙題字が2色刷りとなり、内容も地域だより、声の広場、知識の窓、技術情報などを加えて、多彩に充実された。また広報委員長交代により、編集者が棚町修一先生になった。そしてこのスタイルが18年間、71号まで続き、72号からA4版サイズの大版になり、その後、表紙には写真が入り、しかもこれが続いてカラー写真となり、また内容の記事はいよいよ充実して現在に至っている。

“10年ひと昔”と云う。ふた昔半の歴史を刻む「技術士だより・九州」は、技術士会九州本部にとって、また九州地区の技術士みなさんにとって、二つとない宝物といっても過言ではあるまい。技術士各位が、壁を取り払って物を捉える広い視野と、ものごとを弾力的に考える力をもち、活き活きした活動をするため、その支えとしてなくてはならない拠りどころが「技術士だより・九州」だと考える。

継続は力なり。これからの「技術士だより・九州」のますますの充実と発展を祈ってやまない。

(E-mail : ry15kant@biscuit.ocn.ne.jp)

広報委員長 **棚町 修一**
(建設、総合技術監理・福岡)



「技術士だより」は平成元年8月、土居貞夫支部長の時に創刊され、平成26年7月で100号を迎えました。年4回発行の季刊誌で、25年(四半世紀)にわたり九州本部(旧名：支部)の様々な活動の記録、会員の思いの数々が掲載されてきました。九州の季刊誌をアピールするために「技術士だより・九州」と名称を変更し、表紙の充実(九州各県の資源を紹介)を図ってきました。

「技術士だより30号」に掲載された水上信照技術士(当時支部長)の記事を見ると「土居支部長は『創刊にあたって』と題し、会員への情報提供、会員相互のコミュニケーションを深め、『技術士だより』を貴方の声の広場としたい、又前進的で明快な警句、素晴らしい意見を戴き、より充実した紙面になることを確信して、明日へ踏み出す第1歩としたい、と挨拶されている。・・・紙面も創刊号4頁、第2号8頁、第3号12頁、第4号16頁、・・・表紙スタイ

ルも第6号からブルーの色付きものとなった」と紹介されています。

25年の歩みを振り返ると、創刊時に土居支部長が目指しておられた「会員への情報提供、会員相互のコミュニケーション」をより充実していくための試行錯誤の連続でありました。その結果、「月刊技術士」とは一味違い、会員の声前面に出た季刊誌となり「技術士だより・九州」の特徴がにじみ出てきているように感じています。会員の声として、職種の違いによる「官庁技術士の声」「学内技術士の声」「企業内技術士の声」「独立技術士の声」、経験や立場の違いによる「熟練技術士の声」「女性技術士の声」「若手技術士の声」「修習技術者の声」「協賛会員の声」に分けて様々な意見や悩みなどを掲載してきました。最近では、「私のチャレンジ」や「ミニ特集」での会員の人となり、技術士有志の研究会での講演や見学会を掲載しております。さらには外部執筆者への原稿依頼や官公庁への「技術士だより・九州」の配布など開かれた技術士会を目指して情報発信を行うようになってきました。

これまでの25年の歩みを5年ごとに5期に分け、それぞれの編集内容等を振り返り、100号の歩みの概要を下表にまとめました。

(E-mail : tanamachi601@nifty.com)

分類・年月	技術士だより 編集内容	関連事項	支部長・本部長
1期(1～20号) 平成元年8月～平成6年6月	創刊号 土居支部長の巻頭言、支部の25周年案内記事、新役員の紹介等で発行部数約500部 ～20号 編集内容としては、巻頭言、私の提言、日本技術士会近況、支部・センター委員会、部会だより、声の広場、行事レポート、随想、会員ニュースで構成	事務局は天神「新天ビル」 H1 第1部～第6部会設置 H4 YCE福岡発足(青年技術士交流委員会の前身) H5 第1回西日本技術士研究・業績発表年次大会(京都)	6代 土居貞夫 7代 原井東男
2期(21～40号) 平成6年9月～平成11年6月	第37号から「賛助会員」の掲載 H10 「技術士だより」印刷を活版印刷に	H9 第24回技術士全国大会(福岡) H10 第1回地域産官学と技術士合同セミナー(於福岡市) H10 事務局を現地に移転 H10 「広報委員会」設置	7代 原井東男 8代 水上信照 9代 川崎迪一
3期(41～60号) 平成11年9月～平成16年6月	第43号 「地域活動」のコーナーを新設 第50号 50号特集(若い息吹き)	H12 第1回中国三峡ダム見学会 H16 第7部会(45歳以下の技術士、青年技術士交流委員会の全身)設置	9代 川崎迪一 10代 田中譲治 11代 泉銘昭雄
4期(61～80号) 平成16年9月～平成21年6月	第62号 「修習技術者の声」「知識の窓」を新設 第70号 執筆者の顔写真掲載を開始 発行時期を1月、4月、7月、10月に変更 紙面をB5版からA4版に変更 第73号 「熟練技術士の声」「女性技術士の声」「私のチャレンジ」を新設 第77号 第80号 「若手技術士の声」と「女性技術士の声」を新設し、隔号で掲載	H17 第32回技術士全国大会(福岡) H19 九州技術士センター廃止 第65号より「月刊技術士」に「技術士だより」を同封して会員への発送	11代 泉銘昭雄 12代 光岡 毅 13代 甲斐忠義
5期(81～100号) 平成21年9月～平成26年7月	第82号 「技術士だより」から「技術士だより・九州」に名称変更 表紙を設け、写真を白黒で掲載 「賛助会員の声」、「官庁技術士の声」・「学内技術士の声」・「企業内技術士の声」・「独立技術士の声」を新設 第83号 年1回開催の技術士論文発表会の「最優秀賞、優秀賞」の論文を掲載 第86号 「表紙」の写真をカラーで掲載 第95号 「ミニ特集」を新設 第100号 100号特集(県支部活動の抱負)	H23 「九州支部」から「九州本部」へ名称変更 H24 「技術士だより・九州」を主要な官公庁に配布 H26 九州各県に県支部技術士会が発足 H26 九州本部ホームページリニューアル H26 第41回技術士全国大会(福岡)	13代 甲斐忠義

100号記念として、新しく発足しました九州各県支部活動の抱負を特集いたします。

佐 賀

県支部活動の抱負

佐賀県支部長 みやぞえ かずゆき
宮副 一之
(建設・総合技術監理・佐賀)



1. 佐賀県支部活動の目的

佐賀県内における技術士会活動としては、昭和40年6月の九州支部設置以来、九州支部組織下の佐賀県地区技術士会として活動してきました。

平成23年5月の公益社団法人日本技術士会「地域発議の設置運営に関する規則」制定を受け、佐賀県支部会員の一層の倫理の啓発、資質の向上、品位の保持に努め、技術士制度の理解と技術士の知名度・地位の向上、技術士の活用促進、会員の増加を図り、地域の発展・活性化に資する会へと発展させる目的で、佐賀県支部設置へ向け発議し、平成25年12月1日付で佐賀県支部を設置いたしました。

平成25年7月の佐賀県支部発議時の佐賀県内の公益社団法人日本技術士会の会員数は56名であります。

2. 今後の活動の抱負

佐賀県支部では、統括本部・九州本部の事業計画との連携を図りながら、以下のような活動を行ってまいります。

(1) 活動の基本的視点

佐賀県は、今から約150年前、幕末から明治にかけて、葉隠の精神のもと、科学技術分野の先駆者として活躍された偉人

を多く輩出しています。

一方、佐賀県支部は、他の県の支部と比較して、少ない会員で構成された組織であります。しかし、会員ひとりひとりが、様々な分野において、近代の大先輩方の精神を受け継いでおります。この受け継いだ精神をもって、地域で活躍されている各団体との連携・協働を図りながら、目的の達成を図ることを活動の基本的視点としています。

具体的には、国土交通省、佐賀大学、佐賀県、佐賀県内市町、一般社団法人佐賀県県土づくりコンサルタンツ協会、公益財団法人佐賀県建設技術支援機構、一般社団法人佐賀県建設業協会、軟弱地盤研究会、特定非営利活動法人技術交流フォーラム、木材利用研究会(佐賀)等との連携であります。

(2) 活動内容

2回/年の技術懇話会の開催を致します。

春の5月には、佐賀県佐賀城本丸歴史館にて、歴史的技術継承も踏まえながら、当面5年間は“減災と防災”をテーマに懇話会を開催いたします。

H26年度は、下記内容で5月31日に開催いたしました。

- 1) 佐賀平野大規模浸水危機管理計画と運用について(岡田智幸氏国土交通省九州地方整備局 武雄河川事務所長)
- 2) 藩政時代における佐賀平野の「地域治水」について(岸原信義氏佐賀大学客員研究員)

秋の11月には、佐賀県武雄温泉にて、タイムリーなテーマにて懇話会を開催し、地域の技術者のあるべき方向について、夜なべ談議もしていきたいと夢膨らんでいます。

(E-mail : k-miyazoe@kyukoh.co.jp)

長 崎

県支部活動の抱負

広報委員 やまぐち あきみつ
山口 昭光
(農業・長崎)



1. 長崎県支部について

長崎県内における技術士活動は、昭和40年6月の九州支部設置以来、九州支部組織の下で県内の技術士が長崎地区として活動してきました。平成23年5月、公益社団法人日本技術士会への移行に伴い、長崎地区は平成26年6月14日設立年次大会を開催し、九州本部長崎県支部として船出いたしました。

長崎県支部は設立したばかりで態勢が整っていないこと、「長崎県技術士会」の役員が「長崎県支部」の幹事として信任されたこと等から、当面、二つの組織が並存し、「長崎県技術士会」と連携して活動していきます。

会員状況 120名(長崎県技術士会との重複59名)

正会員82(56)名、準会員38(3)名

事務局 〒851-0134 長崎市田中町585番地4

扇精光コンサルタンツ(株)内

2. 今後の活動

支部会員の一層の倫理の啓発、資質の向上、品位の保持に努め、技術士制度の理解と技術士の知名度・地位の向上、技術士の活用促進、会員の増加を図り、地域の発展・活性化に資する会へと発展するよう努めます。できたらほやほやの県支部ですので知名度・認知度ありません。しかし、県支部には機械、船舶、電気電子、化学、金属、建設、上下水道、衛生工学、農業、森林、水産、応用理学、環境の技術者が集っています。これを利用しない手はありません。必ずや何らかの形・方法で地域へ貢献できると考えます。そのため、①CPD研修、②各団体との連携を重点活動と位置付けました。活動に当たっては、九州本部と連携するとともに、「長崎大学」、「長崎地盤研究会」、「産業基盤維持管理技術研究会」と連携し、地域に貢献できる・地域に必要とされる技術者集団組織を目指します。

平成26年度は、以下の活動を行います。

- ①役員会議 年3回(年度当初、12月初旬、年度末)、
- ②見学会: 2回
- ③CPD研修: 2回

(E-mail : a.yamaguchi@ougis.co.jp)

大 分

もっと異業種交流を!!

大分県支部長 わたなべ ひろし
渡辺 浩志
(建設・大分)



九州本部をはじめ多くの方々のご尽力により、大分県も昨年公益社団法人として設立されましたが、今まで以上に活発な活動をしようと会員の皆さんと一緒に取り組んでいるところです。

本県では会員数も118名になり会員以外の技術士公務員も年々増加し誠に喜ばしいと感じています。仕事の遂行に当たり「継続的学習」も年3回開催し毎回多くの会員に積極的な参加をいただいております。

しかしながら課題がないわけではありません。

本支部118名会員のうち96名が建設・農業部門で81%以上を占めております。

このため、自分の専門分野以外の会員の方々との交流は報告会の時くらいが実情です。他県も同様な状況ではないでしょうか？

社会の構造が複雑かつ多岐にわたる現在、自分の

専門分野だけでの勉強ではどうしても、本来求められているニーズにきちんと応えられることになるのか不安になることもしばしばです。

一方、自分の専門分野をより深く掘り下げて勉強をしようと思えば、他のことも勉強し直径の大きな円から掘り始めなければなりません（十字架論と言われるそうです）。

このためにも我々技術による社会貢献を目指すものは、いっそう幅広い知識・技術に磨きをかけなければなりません。

このため最近のCPDでは、民間の方による「まちづくり」への挑戦事例や「アートを通じた地域おこし」などを紹介し好評を博しております。

技術士会は多くの分野に携わるプロフェッショナル技術の集団です。自分の専門分野だけでの付き合いの中では知らず知らずに「蛸壺」に入ってしまうます。

今後とも多くの異業種の方々との交流をさらに深め、真に社会が求めるニーズに貢献できるよう、これからも支部の運営を皆さんと一緒に努めてまいる所存です。

(E-mail : w164fit850g6mke3a49xz0ub@oita.email.ne.jp)

熊 本

県支部活動の抱負

広報委員 いさみ ひでただ
勇 秀忠
(建設・熊本)



「技術士だより・九州」100号発行まことにおめでとうございます。平成8年3月に技術士登録後に日本技術士会に入会して19年目を迎える。平成23年6月から熊本地区の広報委員を拝命し、本年7月で丸3年である。今考えると原稿依頼が来るたびに熊本地区会員へのいっせいメールから始まり、特定技術士への原稿依頼の直談判に注力してきたようである。今回100号記念に際して、各地区（支部）の広報委員への支部活動の抱負の原稿依頼がきた。正直、熊本の県民性は独特なものがあると言われる。それは「まっすぐ」あるいは「個性的」なところでもあろう。県支部の広報委員として、これからの「技術士」の地域における位置づけから県民（一般社会）に対する安全・安心な社会構築（産業界の経済活動）には技術士の役割は今以上に重要になると確信できる。以前は「男は黙って・・・」という

フレーズがあり、技術屋は黙って仕事ができればいいという感覚があった。今の世の中「コミュニケーション」の重要性がますます大きくなってきていて、仕事ができるだけではまずいような雰囲気もある。私は多くの県民（ある意味一般社会）に技術士の存在（ある意味知名度啓発）を知ってもらいたいという強い思いを持っている。大袈裟だが、県支部活動の抱負（決意・志）は、一人の地方技術士また、士業に携わる者として、技術士の認知度向上に注力して行くことこそが自らの生き様に相違ないと考えている。専門分野の技術者から一般社会（特に、お年寄りや子どもたちにも）で生活する多くの県民に技術士はどういったものの考え方を行い、安全・安心構築への下支えに日々練磨していることを継続発信することが使命とも考える。支部活動を積極的に計画・実行することで多くの県民に周知が可能となるだろう。その活動を通じて自らのスキル向上にも貢献できることから、精一杯できる範囲で前向きに精進して行きたい。倫理を柱に技術士の知名度向上にこれまで以上に傾注する。熊本県支部が段階を追って成長できるように微力ながら支部活動に注力していく覚悟です。

(E-mail : isami-h@kowa-kk.co.jp)

宮 崎

県支部活動の抱負

宮崎県支部長 ^{ふじわら ひでし} 藤原 秀志
(建設、農業、総合技術監理・宮崎)



まず、本誌100号の発行にあたり、棚町修一現広報委員長はじめ歴代の広報委員長のご尽力に対し敬意を表します。

さて、宮崎県支部は昨年11月に実質的な活動を開始し、5月24日に支部設立の式典・祝賀会を開催したところです。今回の支部設立は組織の充実と運営強化に資するものと考えます。

宮崎県内の社会環境と自然環境を産業・科学技術に関する視点から概観すると、恵まれた自然環境、豊富な新工エネルギー資源、各地域の特色ある産業の展開、高い食料・木材供給能力、などの強み・特性があります。一方、産業の基盤や県民生活の基礎となる高速道路交通ネットワークに代表される社会資本整備の遅れ、また、既存の社会資本の老朽化、さらに、南海トラフ巨大地震では、日向灘沿岸部を中心として大きな被害が想定されているなどの課題も

指摘されています。

このような、強みや特性を伸ばし課題を解決するには、科学技術に関する高等の専門的応用能力を有する私ども宮崎県支部の技術士の果たす役割・責任が大きいものと思われます。また、宮崎県支部に所属する技術士の登録部門は全21部門中15部門であり、地域の複雑化する技術的諸課題に十分対応できるものと考えます。

以上を踏まえ、宮崎県支部においては今後、会員各自が技術研鑽に努め資質向上を図り、公益確保の立場から次の4点について重点的に推進していきたいと考えています。

- ①市民と一体型の減災・防災対策の支援
- ②自治体や関係機関、各種団体等に対する技術協力や支援
- ③統括本部及び九州本部、関係学協会との連携強化によるCPD内容の充実
- ④大学、高等専門学校など地域教育機関との産学連携強化

また、併せてこれらの活動を通じて、技術士及び日本技術士会の知名度向上と会員の増大を図ってまいります。

(E-mail : fujiwara@kokudo-c.co.jp)

鹿児島

県支部活動の抱負

鹿児島県支部長 ^{ごとう ゆういちろう} 後藤 祐一郎
(農業、総合技術監理・鹿児島)



鹿児島県におきましては、鹿児島県支部設置についての発議を平成24年9月に当時の会員82名中発議者55名で九州本部長あて申請致し、同年11月15日に理事会で承認されました。その後、平成25年2月から3月の地域役員選挙、7月の鹿児島県支部長の任命を経て、8月24日に鹿児島県支部設立総会を開催し、支部活動を本格的に開始致しました。

もとより技術士会は21部門の専門分野からなる異業種の会員で構成される組織ではありますが、鹿児島県支部は支部設立に当たり制定した「鹿児島県支部の運営についての手引き」の基本理念「会員の一層の倫理の啓発、資質の向上、品位の保持に努め、技術士制度の理解と技術士の知名度や地位の向上、技術士活用促進、会員の増加を図り、地域の発展・活性化に資する活動を行うことを運営方針とする。」を達成するための活動を行って参ります。

活動は、支部設置に当たり会員に実施しましたアンケート調査の結果に基づき、日本技術士会からの情報の伝達や資質向上のためのセミナーや講演会等のCPDの開催など、直ぐ取り組めることから地道に始め、順次活動の拡大を図って参ります。

基本的には、鹿児島県支部の独自性を確保しつつ、併せて鹿児島県内で既に活動されている類似団体である鹿児島県技術士会並びにNPO法人鹿児島技術士の会と連携協力して活動していくことになります。

具体的には、運営についての手引きの「基本運営」に基づき活動を行いますが、平成26年度は既に開催致しました年次大会におきまして、3回の役員会、各1回の各種委員会、2回の類似団体との協議会、4回のCPDの開催等の活動内容が承認されています。

この中のCPDにつきましては、九州本部並びに各県支部のご支援ご指導を頂きながら、複数の外部講師による複数演題の講演会を企画し、他団体のCPDとの差別化を図って参ります。

限られた予算の中での活動ではありますが、会員の支部活動に対する全面的なご協力を頂きながら少しずつでも前進して参る所存で御座いますので、関係皆様のご指導ご鞭撻を切にお願い致します。

(E-mail : gotoh@shin-nihon.net)

中央・統括本部情勢

理事会報告

公益社団法人 日本技術士会
理事 さ たけ よしろう 佐竹 芳郎
(建設、総合技術監理・福岡)



H25年度第6回及びH26年度第1回理事会は、平成26年3月13日及び5月9日に開催されました。合わせて①審議事項が17件、②報告事項が15件ありました。主要な事項を報告いたします。

1、H25年度事業報告と収支決算及びH26年度事業計画と収支予算が了承されました。

2、電磁的方法による総会委任状制度の導入が了承されました。

希望する会員にはインターネットを利用しての総会議案に議決または委任を可能とする制度を導入する。

3、地域組織の設置運営に関する規則の変更が了承されました。

地域本部参与は副本部長・理事経験者の他、長期に幹事又は事務局長を務めるなど特段の貢献のあった者から任じる。

4、統括本部事務局移転に係る基本方針が了承されました。

統括本部事務局移転検討特別委員会の報告を受け、一般会計担当部分は基本的に現状維持した上で、特別会計担当部分のみを分離移転することが最も適当と判断する。移転地は渋谷区内ビルを候補とし、移転時期は1年以内を考える。

5、H26年度会長表彰者が了承されました。(九州本部のみ抜粋、敬称略)

会長表彰規則に基づき推薦があった候補者78名(全国)を了承した。

①入会歴が35年以上で、本会の発展に貢献のあった者・・・柏原公二郎、丹生敏明

②入会歴が10年以上で、地域本部、部会若しくは委員会活動を通じて本会の発展に著しく貢献のあった会員・・・長野義次、久保川孝俊、持田拓児、古城輝夫

6、H25年度技術士第二次試験結果が報告されました。

H25年度 合格者は3,801名 対受験者合格率は12.1%(H24年度 合格者は3,409名 対受験者合格率は10.4%)

7、広報委員会から次の報告がありました。

月間「技術士」で「応用倫理シリーズ」を5回に分けて掲載する予定だ。(5月号、6月号、8月号、9月号、10月号) (E-mail: satake@qscpuia.or.jp)

平成25年度第4回 本部長会議報告

九州本部長 か い ただよし 甲斐 忠義
(建設・福岡)



開催日：平成26年4月18日

会議場所：葦出第2ビル5F会議室

出席者：吉田会長、山崎副会長、鮫島副会長、佐竹副会長、
高木専務理事、西村常務理事、横山常務理事、
各地域本部長 議長：四国本部武山本部長

統括本部報告

- 1 平成26年度事業計画について 高木専務理事
- 2 平成26年度収支予算について 西村常務理事
- 3 平成25年度技術士第二次試験結果について 横山常務理事
- 4 科学技術・学術審議会技術士分科会制度検討特別委員会報告について 吉田会長
- 5 技術士CPD登録証明書発行に係る制度変更について 鮫島副会長
- 6 会員拡大アンケートについて 鮫島副会長
- 7 その他

① 統括本部事務局移転検討特別委員会検討状況

山崎副会長

② 統括本部・地域本部事務局会議(WEB)の開催について 西村常務理事

地域本部関係

I 審議事項

近畿本部：「地域本部設置運営に関する規則」第10条第1項(役員の責務)について地域役員は、受験指導を行う法人の構成員を兼ねないようにするとあるが、解釈に不明朗となっているので事例を示していただけないか。回答 山崎副会長 総務委員会で各地域の実態を聞いたうえで検討をしたい。

II 地域本部報告事項

行事開催、役員会開催について各本部長から報告

III 意見要望事項

北陸本部：WEB会議システムの県支部への拡大について
近畿本部：JABEE課程修了者への技術士二次試験受験の働きかけについて検討要請

中国本部：大学・高専に対する技術士普及啓発の説明会に統括本部の修習技術者支援実行委員会の研修をSkypeで中継できないか検討を要請

九州本部：①第41回全国大会論文募集のお願い ②統括本部からの原稿依頼期間が短すぎるので改善要望 ③本部長会議議事録作成の改善について

次回開催：平成26年7月30日 担当議長：九州本部 甲斐本部長予定 (E-mail: k.tmth@blue.ocn.ne.jp)

委員会・部会報告

第41回技術士全国大会 実行委員会から

第41回技術士全国大会

実行委員長 まなべ かずよし
真鍋 和義
(上下水道、総合技術監理・福岡)



第41回技術士全国大会（福岡）が本年11月9日から開催されます。概要は下記の案内の通りです。関連行事として1日目夜のレストランシップ「マリエラ」におけるウェルカムパーティ、式典当日のパートナーズツアー、式典翌日からの日帰り及び1泊2日のテクニカルツアーも併せて計4日間に亘ります。

また、1日目の午後から倫理委員会、防災支援委員会、青年交流委員会による会議が開催されますが、同時に正式プログラムとは別に各部会による講演会等も企画されています。また青年交流委員会では、前日の11月8日（土）からテクノツーリズムを始めとした企画をされています。

今回の大会テーマは「技の連携 人・もの・くに

づくりのパートナー」としています。産官学の連携により、技術士があらゆる地域産業の活性化に寄与する技術士活動を目指すべきとの思いをテーマにしています。

大会2日目の午前の部は、「技術士活動体験発表大会」として、全国から募った技術士活動についての優秀論文6編及び技術士会会長賞の表彰を受けた福岡大学の学生による論文発表を行います。

午後の大会式典の後半の記念講演は最先端技術を講演していただくものとして、「これからの宇宙旅行」と題して九州大学大学院航空宇宙工学部門の麻生茂教授にお願いしています。麻生教授は、先般、国際宇宙ステーションでの長期間の宇宙滞在から帰還された、若田光一船長の在学時の先生です。

交流会では、アトラクションを楽しみながら、美酒とご馳走を味わいながら参加者の交流・親睦をはかり人脈の拡大につなげて欲しいと思います。

一昨年の9月に実行委員会を立ち上げ準備をしてきましたが、いよいよ本番が近づき、具体性が高まり、大会成功に向けがんばっているところです。大会への参加と熱心な討議など、大会の盛り上がりに向けてご協力を切にお願い申し上げます。

(E-mail : byc10543@nifty.com)

■第41回技術士全国大会（福岡）のご案内

《大会テーマ》「技の連携 人・もの・くにづくりのパートナー」

- 主催：公益社団法人 日本技術士会 ●期間：2014年11月9日（日）～12日（水）
- 会場：福岡国際会議場（福岡市博多区石城町2-1 TEL：092-262-4111）
- 大会日程

11月9日（日）	12：00～13：00 13：30～17：00 14：00～17：00 18：35～20：25	全国青年技術士交流会議 第2回技術者倫理ワークショップ 第10回全国防災連絡会議 青年技術士の集い ※ウェルカムパーティ （博多湾ナイトクルーズ・レストランシップ「マリエラ」）
11月10日（月）	9：30～12：45 12：45～14：00 14：00～15：10 15：20～16：40 16：40～16：55 17：30～19：30 8：45～16：30	技術士活動体験発表大会 昼食 大会式典：開会挨拶、式辞、来賓祝辞、祝電披露 記念講演「これからの宇宙旅行」 九州大学大学院航空宇宙工学部門教授 麻生 茂 氏 大会宣言、次期開催地報告、閉会挨拶 交流パーティ（福岡サンパレス） ※パートナーズツアー（飯塚、太宰府）
11月11日（火） ～12日（水）	9：00～17：00 8：45～	※テクニカルツアーA（日帰り）：北九州市内 ※テクニカルツアーB（1泊2日）：熊本城、阿蘇、九重方面

※はオプション行事です。

注1）日時、内容等につきましては、今後、変更の可能性があります。

注2）参加受付は、8月上旬の案内冊子郵送後から開始予定です。

論文審査委員会から

論文審査委員 きよさき じゅんこ
清崎 淳子
(応用理学、博士(理学)・福岡)



平成26年度の論文募集について

平成26年度、九州本部・論文審査委員会は以下の2件の論文募集を予定しています。

(1) 平成26年11月10日(月)開催の『第41回技術士全国大会(福岡)』・「技術士活動体験発表会」

発表会では、応募論文の中から6編の口頭発表を予定しています。応募いただいた論文は、九州本部論文審査委員会の審査・検討を経て、当日論文集として配布いたします。投稿希望の方は九州本部・全国大会実行委員会(mail: pekyushu@nifty.com)宛てお申込みいただきますと、原稿執筆要領および原稿テンプレートのファイルを配布致します。

・大会日時: 平成26年11月10日(月) 9:30-12:45
会場: 福岡国際会議場

・大会テーマ:『技の連携 人・もの・くにつくりのパートナー』

論文テーマ①海外技術協力、②防災技術、③環境技術、④ものづくり、⑤その他(①～④に該当しないもの)

・原稿作成要領概要: A4原稿4ページ、
投稿締切 8月31日(日)
・提出・問合せ先: 九州本部全国大会実行委員会
(mail: pekyushu@nifty.com)

(2) 平成27年2月開催予定の第4回CPD研修における平成26年度論文発表大会

全国大会開催年度ではありませんが、九州本部の技術士、技術士補など修習生として活動している皆様の活動体験論文発表大会を開催する予定です。本年度は特に、技術士を目指す若手の方々や女性の技術者の方々に積極的な参加をお勧めします。企画の詳細は今秋ごろお知らせ致します。

以上、2つの論文募集に皆様のご参加をお待ちしています。奮ってご応募いただくとともに、周辺へのお声掛けも重ねてよろしくお願い致します。

(E-mail: jkiyosaki@enecomm.com)

防災委員会から

防災委員長 や か べ ひでみ
矢ヶ部 秀美
(建設、応用理学・福岡)



新緑の候にもかかわらず、中国大陸からの黄砂の飛来が著しく、新緑も霞むような状況が続いております。気象庁の長期予報では、今年はエルニーニョの年で、冷夏が心配されていますが、1993年鹿児島豪雨災害をもたらした時の状況を考えると、従前からの準備を怠らないようにする必要があります。

ところで、会員のみなさまにお願いしました防災活動に関するアンケート調査は、お陰様で二次募集(締切5月20日)まで含めると115名の方々からのご返答を頂くことができました。ご協力に大変感謝致します。現在、調査結果の集計等を行っておりまして、近々ご報告できるものと考えております。

前号でもご報告しましたが、防災委員会は本年

11月9日に開催予定の第10回全国防災連絡会議に向けての準備を中心に活動を行っています。開催テーマは、自然災害に見舞われやすい九州地方のことを勘案して、「巨大化する自然災害に備える」というものです。技術士は、その地域性を活かし、市民と連携して平常時の減災・防災教育にもっと貢献できるものと考えています。市民と共に、「正しく相手を知り、正しく恐れ、正しく備える。」について議論を深められたらと思っています。

次に、もう一つの活動として、九州内の防災・減災に取り組んでおられる学識経験者(大学、高専など)に本部および各県支部のCPD研修会への講師招請の交渉を行っています。話題提供できる講師とテーマの一覧表を作成し、近日中には各県の減災・防災担当者へ配布する予定です。九州内の学識経験者の新たな減災・防災に関する知見に触れる機会を増やして、学界と技術士会との交流を更に促進していきたいと思っています。

(E-mail: h.yakabe@diaconsult.co.jp)

環境部会講演会報告

環境部会会長 **あべ しずお**
阿部 静夫
(上下水道、建設、総合技術監理・福岡)



環境部会では、昨年度に引き続き、平成25年11月1日(土)に技術講演会を開催いたしました。講演会には、申し込み者数52名、参加者数46名と、昨年度とほぼ同じ数の方々にご参加いただきました。講演内容は、海外における水道事業技術指導の話と、25年1月頃からクローズアップされてきましたPM2.5及び気候変動の話でした。

1.「海外の島国における水事情の現状と将来について」

小田氏(元福岡市水道局部長、技術士)より、JICA海外シニアボランティアとして2年間フィジーで漏水対策等の技術指導を行った経験をもとに、海外の水事情及びフィジー共和国の水道事業特にナンディ・ラウトカ地区水道事業に関する漏水防止支援事業等の現状と将来についての講演をいただきました。まず、①世界の水事情とフィジーの概要を説明された後、②フィジー上下水道公社の概要、③取水ダム、ポンプ取水場、浄水場、送水管・配水管等施設の概要、④水質管理、水道料金、漏水修理等維持管理の現状、について詳細な説明がありました。日本に比べれば施設、運営とも遅れている面が多く、日本人技術者の貢献できる領域は少なくないということでした。小田氏は、帰国後フィジーでの経験を生かし、福岡市水道局とフィジー国との「JICA草の根技術協力事業」を立ち上げられ、今後と

もフィジー国の水道事業の発展に寄与されていく予定であることを明言しておられました。

2.「大気汚染微粒子及び黄砂の飛来予測について」

竹村先生(九州大学応用力学研究所 准教授)より、最近注目を浴びているPM2.5など大気汚染微粒子及び黄砂の飛来予測について説明されました。先生の主要な研究対象は気候変動であり、その関連で大気汚染微粒子の研究をされているとのこと。まず、先生の開発された数値シミュレーションモデルSPRITARSを用いた①日本の大気汚染の特性、原因の解明、②中国の大気汚染状況及び化石燃料や砂漠からの微粒子飛来状況の研究内容の説明がありました。次に、③温室効果気体による気候変動のメカニズム解析・21世紀の気候変動予測を、全球気候解析モデルさらには生物過程などを追加した地球システムモデルと全球雲解析モデルを用いて行う研究の紹介がありました。講演後の質問では市民の健康被害に関する質問など30分近くも予定時間をオーバーするほど好評でした。

小田氏の講演は一般にはなかなか聞けない海外の離島の話であり、竹村先生の講演は大気汚染・地球温暖化予測の最先端の研究の話であり、環境部会技術士にとっても極めて有意義な講演会でした。両先生及び環境部会委員の皆さんに厚く御礼申し上げます。



(E-mail : s-abe@toshi-kc.co.jp)

建設部会活動報告

建設部会会長 **すぎもと せいじ**
杉本 正二
(建設、総合技術監理・福岡)



平成25年度において建設部会は主に二つの活動を実施しました。ひとつは平成25年8月28日(水)に実施した現地見学会であり、あと一つは同年12月11日(水)に実施した建設部会CPDであります。

8月に実施した現地見学会においては29名の参加者を得て、福岡県八女地域における平成24年度九州北部豪雨災害の復旧状況と、重要文化財の筑後川昇開橋を見学しました。この活動内容の詳細については、建設部会委員の中村貞芳氏により「技術士だより・九州」の平成25年度秋期号<97号>に報告掲載されています。

12月に実施した建設部会CPDは福岡市博多区吉塚の県中小企業振興センター会場において50名の参加を得て行

いました。講演は最近とくに大きく問題化されてきている、公共インフラの長寿命化・維持管理に関する2題で、NEXCO西日本の今村壮宏氏による「関門橋リフレッシュ事業の概要」と九州大学准教授の貝沼重信氏による「インフラ高齢化対策と今後の取り組み」でありました。いずれも新たな取り組みや新たな視点での橋梁維持管理方法等の紹介がなされ、技術の研鑽に大きく役立つものでありました。

このほかにも建設部会では「記録に残したい身近な土木構築物(土木遺産)等の紹介原稿」を募集しています。これは地域の身近な中小河川や地方道などにおける昔の災害記録や特殊な構造物などについての紹介原稿を募集し、HPや小冊子にまとめて広く紹介していこうとするものです。この募集には期限を設けていませんのでこれに関する投稿のご意向或いはご質問等がありましたら私のアドレスへメールいただければ返信にて投稿要領などをお送りいたしますので是非ご投稿いただければありがたく存じます。

平成26年度においても皆様の期待に副うような時期を得た取り組みができるよう努めてまいりたいと考えています。
(E-mail : sgmts7501572@lep.bbq.jp)

CPD報告

研修委員会の活動について

く ぼ か わ た か と し
研修委員会 **久保川 孝俊**
(建設、総合技術監理・福岡)



研修委員会ではCPD課題区分Aの一般共通課題を対象として、課題項目の全般を網羅出来る様なCPDを目ざし、年4回のCPDと忘年会時のCPDを担当しています。ただし課題項目の“契約”は講演者とテーマ設定が難しく、ここ10年で1コマしか出来ていないのが実情です。また第4回目は論文発表会で論文審査委員会のお手伝いとなっており、一昨年・昨年の第3回CPDは、西日本技術士論文発表大会や地域産学官と技術士との合同セミナー、本年度は第41回全国大会に振替となりました。

委員は13名で、官庁の情報に強い委員や大学等に人脈のある委員で構成され、CPD運営上の改善点の議論や講師選定を主に検討しており、顔の広い委員の皆様のお蔭で、時期を得た演題や興味のある話が出来ると講師が選定できております。ミスの多い私

ですが、委員の皆様の段取りの良さと動きの機敏さで助けられております。

また年1回程度のアンケートを実施し、聞いてみたい講師・希望テーマ等の意見は出来るだけ取り入れ改善をしておりますが、講師の声が聞きにくいやスクリーンを大きく、また全員二人掛けにして欲しいなど、希望に添えない点も多々あります。

段取りは、第2回CPDが大変で、第1回から講演日まで2ヶ月しかなく、第2・第3の候補者を決め交渉に当たるなど対応に駆けずり回ったり、講演準備の時までに配布資料が手元に届かなかったりで、終わるまで気が休まない委員会ですが、楽しく且つ有意義で充実した講習会となるよう、日々努力しております。

ここ2～3年はCPD参加者が減少しておりますので、出来るだけ多くの参加をお願いいたします。

最後に九州本部の組織は、最近では風通しも良い誰でもが意見を出せる楽しい組織になっており、青年技術士の活躍により活気も出てきております。還暦前後の若手の皆様も是非九州本部の委員・役員となり、会の発展に加担されることを希望いたします。

(E-mail : wctkc540@jcom.home.ne.jp)

佐賀地区CPD報告

こ が ひろふみ
広報委員会 **古賀 浩史**
(博士(工学)、建設・佐賀)



佐賀県支部設立総会に合わせてCPD研修を実施した。佐賀県支部では年2回のCPDを予定しており、毎年5月に実施予定の1回目は出水期前ということもあり、防災・減災をテーマとしたCPDを実施することにしている。平成26年度は5月31日に第1回目を実施し、武雄河川事務所長の岡田智幸所長、佐賀大学客員研究員の岸原信義先生に御講演いただいた。以下に講演の概要を示す。

1) 佐賀平野大規模浸水危機管理計画と運用について

講師：武雄河川事務所 所長 岡田智幸

広大な低平地が広がる佐賀平野では、過去に度々大規模な浸水被害を受け、集中的に治水事業が進められてきた。地球温暖化の影響でこれまでの計画規模を超える浸水被害の発生が懸念される現在、住民の生命を守るためには、ハード対策に加えてソフト

対策を総合的に実施する必要がある。こうした背景により、武雄河川事務所が事務局となって進めている佐賀平野大規模浸水危機管理計画では、防災機関が連携して各種の防災施策を実施している。

2) 藩政時代における佐賀平野の「地域総合治水」について

講師：佐賀大学客員研究員 岸原信義

有明海の激しい干満の差による洪水・濁水の増大に対抗する手段として、藩政時代に佐賀平野で構築された治水・利水システムは全く独創的なものであった。上流部の扇状地帯では他に例の無い“一番堤の破堤防止の霞堤”や“死水域化型高水敷”などで河川の“瀬替”が行われ、中流部の自然堤防地帯では河川の“合流”が行われ、その上流部に洪水と有明海の満潮が重なった場合に機能する“満潮型遊水地”が造成された。“瀬替”・“合流”システムは単一の流域で行われるものでなく、複数の流域が組み合わせられて形成されるものである。つまり、佐賀平野の治水は“流域治水”などと云う様な矮小なものではなく、極めて高度・広範囲な地域のものであった。この“地域治水”は今後の治水に大きな示唆を与えるものである。

(E-mail : koga@shinwa-techno.co.jp)

平成25年度 CPDと技術士試験 (一次および二次)合格祝賀会

青年技術士交流委員会 **上原 志穂**
(応用理学・北九州)



平成26年4月19日(土)、福岡商工会議所ビルにおいて公益社団法人日本技術士会九州本部及び青年技術士交流委員会による「平成25年度 CPDと技術士試験(一次および二次)合格者祝賀会」が開催されました。講演内容について報告致します。

◆講演1「近年の局所的集中豪雨の要因と各種防 災情報の読み方」

講師：国土交通省 九州地方整備局 九州技術事務所 施工調査・技術活用課 技術活用係長

古賀 忠直 様

九州北部豪雨における被害の実例を紹介しながら、近年の大雨の傾向や気象災害の要因について説明され、気象予報や天気図、防災情報、数値予報を活用し、より正確な気象情報を読む方法について講演頂きました。

◆講演2「日本技術士会の活動」

講師：日本技術士会九州本部 本部長

甲斐 忠義 様

日本技術士会統括本部と九州本部の組織・活動を

紹介しながら、平成25年度の試験結果や合格率、技術士の制度、技術士のビジョンを具体的な事例を含めて説明され、新技術士への理解を促すだけでなく、既技術士にとっても有意義な内容を報告頂きました。

◆講演3「技術士倫理について」

講師：日本技術士会九州本部 副本部長

沼尻 健次 様

「技術士倫理とは何か」という概念から、実際に倫理が必要となる事例の紹介、技術者倫理をめぐる最近の動向、必要となる倫理観など、多様な方面から技術士倫理について説明され、リーダーとしての技術士のあり方や展望についての見解を述べられました。

◆講演4「合格体験記及び技術士となって」

永岩 研一 様(建設部門)

抱負：「期待され、信用され、安心される技術者」でありたい。

◆講師5「技術士二次試験をふりかえって」

大里 信一郎 様(衛生工学部門)

抱負：自分の業務に誇りと責任をもって、これからも取り組んで行きたい。

最後は、青年技術士交流委員会の持田拓児委員長による青年の活動報告で締めくくりました。その後、地階B1aにて、新技術士・技術士補23名と、既技術士・既技術士補49名により盛況な合格者祝賀会が催されました。

(E-mail: uehara-shiho@sanyo-cnsl.co.jp)

会員ニュース

☆(社)日本技術士会(九州支部)入会

〈平成26年2月〉

(所在地)(区分)	(氏名)	(部門)	(勤務先)
福岡 正会員	是沢 毅 建	設	日本工営株式会社福岡支店
鹿児島 準会員	岩田 悦郎 建	設	株式会社渡辺組技術本部
熊本 準会員	黒木 幸夫 建	設	株式会社日測九州支社
大分 準会員	原岡 康彦 建	設	株式会社平和建設営業本部
宮崎 準会員	守田 浩之 建	設	株式会社桜木組土木部
熊本 準会員	大住 聡 上下水道		熊本市役所教育委員会
福岡 準会員	鹿嶋 秀夫 上下水道		福岡市水道局浄水部
鹿児島 準会員	中川 洋次 衛生工学		株式会社サニタリー

〈平成26年3月〉

(所在地)(区分)	(氏名)	(部門)	(勤務先)
福岡 正会員	高藤圭一郎 機	械	西日本工業大学工学部

鹿児島 正会員	田中 寛 機	械	松下エクセルテクノロジー株式会社第5事業部
福岡 正会員	黒木 大輔 電気電子		大日本印刷株式会社ファインオプトロニクス事業部
福岡 正会員	滝口 裕 電気電子		株式会社正興電機製作所ブランド保証本部
福岡 正会員	下田 正寛 化	学	安部国際特許事務所
佐賀 正会員	石村 勝司 建	設	ジェイエシーエンジニアリング株式会社九州支店
宮崎 正会員	神田 稔弘 建	設	有限会社ジャストエンジニアリング技術監理部
福岡 正会員	佐々木睦雄 建	設	千代田化工建設株式会社ひびき出張所
大分 正会員	宮永 安雄 建	設	九豊コンサルタント株式会社
宮崎 正会員	赤池 雅弘 上下水道		日測コンサルタント株式会社技術部
宮崎 正会員	那須 幸義 森	林	宮崎県庁環境森林部

協 賛 会 員

.....[福 岡].....	(株)ヤマウ	[熊 本].....
(株)エスケイエンジニアリング	(株)唯設計事務所	(株)九州開発エンジニアリング
(株)カミナガ	[北九州].....	[大 分].....
(株)久栄総合コンサルタント	(株)永大開発コンサルタント	九建設計(株)
(株)建設環境研究所九州支社	山九(株)	ダイエーコンサルタント(株)
(株)サンコンサル	(株)太平設計	東洋測量設計(株)
ジェイエシーエンジニアリング(株)九州支店	(株)都市開発コンサルタント	西日本コンサルタント(株)
新地研工業(株)	(株)松尾設計	(株)日建コンサルタント
第一復建(株)	[佐 賀].....	日進コンサルタント(株)
大成ジオテック(株)	九州技術開発(株)	松本技術コンサルタント(株)
大和コンサル(株)	(株)九州構造設計	[宮 崎].....
(株)高崎総合コンサルタント	(株)コスモエンジニアリング	(株)アップス
東邦地下工機(株)	新栄地研(株)	九州工営(株)
西日本技術開発(株)	(株)親和コンサルタント	(株)ケイディエム
西日本コントラクト(株)	西日本総合コンサルタント(株)	(株)国土開発コンサルタント
日鉄鉱コンサルタント(株)九州支店	日本建設技術(株)	(株)白浜測量設計
日本工営(株)福岡支店	[長 崎].....	南興測量設計(株)
日本地研(株)	扇精光コンサルタンツ(株)	(株)西田技術開発コンサルタント
(株)福山コンサルタント	(株)実光測量設計	(株)東九州コンサルタント
(株)富士ピーエス本店	大栄開発(株)	(株)都城技建コンサルタント
富洋設計(株)九州支社	太洋技研(株)	[鹿児島].....
平和測量設計(株)		(株)久永コンサルタント

編 集 後 記

「技術士だより・九州」が100号を迎えることになり、これまで寄稿された多くの方々、そして企画・編集に携わってこられた方々の献身的なご協力に改めて感謝申し上げます。振り返りますと、総務委員会の一員として田中譲治先生、小松栄一先生と共に手書き原稿のワープロ打ちからお手伝いを始め、完戸鷗前広報委員長提案による活版印刷への切替、九州各地区の広報委員との連携による企画・編集と紙面づくりも様々な変遷を辿り、今日に至っております。これからも創刊趣旨である「会員への情報提供、会員相互のコミュニケーション」を基本として、技術士(会)を取り巻く環境に敏感に対応しながら、会

員の心の糧となる会誌づくりをモットーに取り組んで参りたいと考えております。(棚町)

発 行：公益社団法人 日本技術士会九州本部
〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街7-1
(シック博多駅前ビル203)

九州本部： ☎(092)432-4441
FAX(092)432-4443
E-mail:pekyushu@nifty.com

九州本部ホームページURL：
<http://www.pekyushu.com/>

印 刷：九州チューエツ株式会社